

ダイジェスト版

子どもの生活と学びに関する 親子調査2015-2018



■研究プロジェクトの目的

東京大学社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所は、2014年1月に、「子どもの生活と学び」の実態を明らかにする共同研究プロジェクトを立ち上げました。このプロジェクトは、子どもの生活や学習の状況、保護者の子育ての様子を複数年にわたって調査し、それらが子どもの成長とともに、どのように変化するかを明らかにするものです。これにより、子どもの生活や学習、子育ての現状や課題をとらえ、よりよい教育や子育てのあり方を検討します。

■研究プロジェクトの特徴

1. 小学1年生から高校3年生の「現在」と「時代変化」をとらえることができる

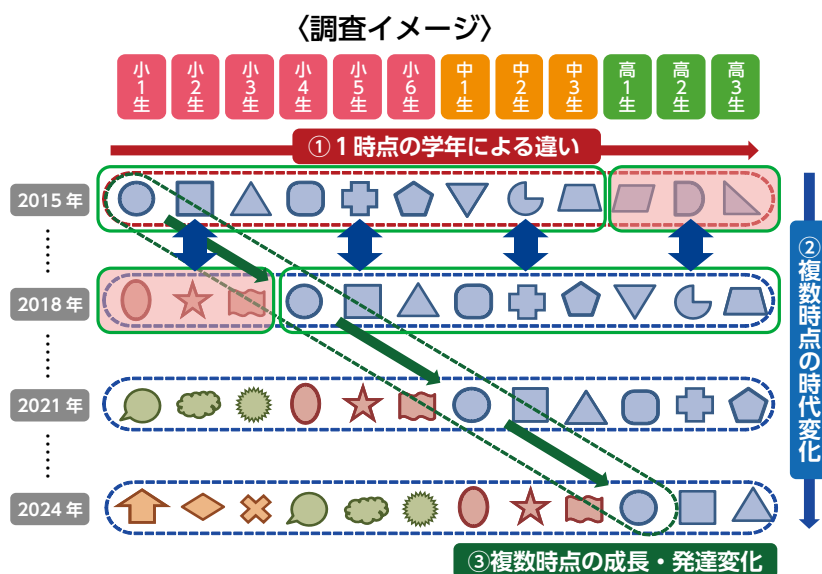
このプロジェクトでは、小学1年生から高校3年生の子どもとその保護者に対して、毎年継続して調査を実施します。これにより、12学年にわたる子どもの生活や学び、保護者の子育ての実態などの「現在」の様子（1時点の学年による違い）を明らかにできます（図中①）。また、経年比較により、子どもと保護者の「時代変化」をみることができます（図中②）。

2. 親子の「成長・発達」のプロセスをとらえることができる（親子パネルデータ分析）

また、このプロジェクトでは、同じ子どもとその保護者を継続して調査します。これにより、子どもが毎年どのように成長・発達していくのか、また、それによって保護者のかかわりや意識はどのように変化するかといった、親子の「成長・発達」の様子や因果関係を明らかにすることができます（図中③）。

3. 子どもの生活と学習にかかわる意識や実態を幅広く、詳細にとらえることができる

子どもを対象にした調査では、生活、学習、人間関係、価値観、自立の程度などを幅広く尋ねています。また、保護者を対象にした調査では、子どもへのかかわりや子育て・教育の意識などを尋ねています。この2つの調査から、子どもと保護者の日々の生活や学習の様子を浮かび上がらせるとともに、子どもと保護者の課題に迫ります。



目次

「子どもの生活と学び」研究プロジェクトについて…	2	2. 親子のかかわりの変化	
調査概要・データについて ……	3	①母親の就業 ……	14
調査設計・基本属性 ……	4～5	②母親の就業と親子のかかわり ……	15
1. 子どもの生活実態の現状と変化		③大切さを伝えていること ……	16
①生活習慣 ……	6	3. 保護者の教育実態の変化	
②家の仕事・お手伝い ……	7	①教育情報源 ……	17
③メディア利用 ……	8～9	②教育費 ……	18
④勉強の好き嫌い、教科の好き嫌い ……	10	③習い事 ……	19
⑤部活動 ……	11	4. 教育や日本社会に対する保護者の意識	
⑥自分について ……	12～13	①教育の変化に対する保護者の意識 ……	20～21
		②教育改革に対する保護者の認知度 ……	22
		③これからの日本社会に対する考え ……	23

調査概要

- **調査テーマ** 【子ども調査】子どもの生活と学習に関する意識と実態
【保護者調査】保護者の子育て・教育に対する意識と実態
※第1回、第4回とも「生活」について詳しく尋ねている。
- **調査方法** 第1回：郵送およびインターネットによる自記式質問紙調査 ※回答者がいずれかの方法を選択。
第4回：郵送による自記式質問紙調査
- **調査時期** 第1回：2015年7～8月、第4回：2018年7～9月
- **調査対象** 全国の小学1年生から高校3年生の子どもとその保護者 ※小学1～3年生は保護者が回答。

		対象者数											
		小学1年生	小学2年生	小学3年生	小学4年生	小学5年生	小学6年生	中学1年生	中学2年生	中学3年生	高校1年生	高校2年生	高校3年生
経年・パネル	第1回(2015年)	1277	1049	1074	939	896	942	901	862	906	1254	1278	1344
		3400			2777			2669			3876		
経年・パネル	第4回(2018年)	1739	1642	1547	1277	1049	1074	939	896	942	901	862	906
		4928			3400 [72.5%]			2777 [70.3%]			2669 [65.9%]		
単年	第4回(2018年)	1739	1642	1547	1328	1136	1152	1004	974	989	982	950	978
		4928 (91.1%)			3616 (78.0%)			2967 (74.6%)			2910 (69.3%)		

- ※第1回は、本研究プロジェクトの「調査モニター（小学校1年生から高校3年生の子どもとその保護者）」全員に調査票を配布した。第4回は、第1回か第2回の少なくともいずれか一方に回答した人を「調査モニター」として調査票を配布した。第1回の「調査モニター」は21,569組、第4回の「調査モニター」は19,715組。ただし、第4回では自然災害の被害があった地域(1,337組)には配布を控えた。
- ※経年・パネルデータの数値は、第1回(2015年)と第4回(2018年)の両方に回答があった有効回収数。
- ※第1回の高校生、第4回の小学校1～3年生は片方にしか回答の対象でないため、経年比較の際は、単年の有効回収数で比較している。
- ※経年・パネルデータの第4回の[]内は、第1回の単年データに回答した人に占める第4回に回答した人の比率(継続率)。
- ※第4回(2018年)の単年調査の数値は有効回収数。()内は有効回収率。
- ※高校生は「在学していない」と回答したものは含めていない。

データについて

本ダイジェスト版では、第1回(2015年)と第4回(2018年)の両方に回答した子どもとその保護者の回答を「経年・パネルデータ」として分析している。

● 経年データについて

経年データでは、3年前(2015年)の回答と現在(2018年)の回答を比べその変化を見ている。

子ども 2015・2018 は子どもの経年データ、保護者 2015・2018 は保護者の経年データを示している。

● パネルデータについて

2018年「パネルデータ」では、一人ひとりについて、3年前(2015年)の回答と現在(2018年)の回答を比べその変化を見ている。子ども 2015-2018 は子どものパネルデータ、保護者 2015-2018 は保護者のパネルデータを示している。また、保護者 2015-子ども 2018 は、2015年度の保護者の回答別に2018年度の子どもの回答をみたものである。

● 単年データについて

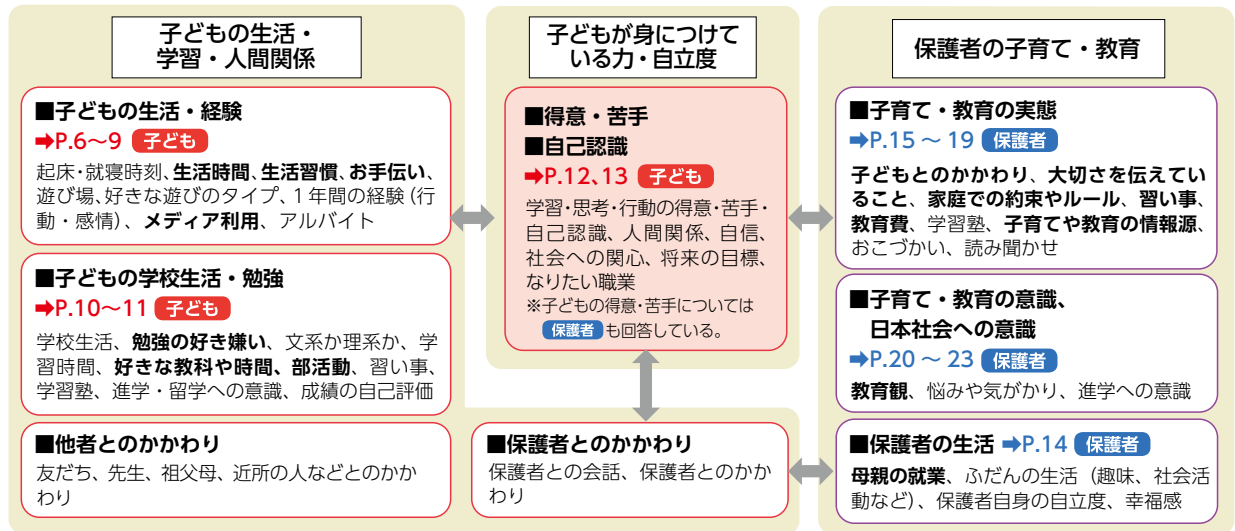
本文中の 子ども 2018 は第4回(2018年)の子どもの回答、保護者 2018 は第4回(2018年)の保護者の回答を示している。

● データを読む際の注意点

- ①本文中では、小学1年生を「小1生」のように示している。また、中学1年生～中学3年生を「中学生」、高校1年生～高校3年生を「高校生」と示している。
- ②図表において、子ども、保護者とも、3学年ごと(小1～3生、小4～6生、中学生、高校生)に有効回収数すべてを集計している場合は、人数を示していない。
- ③図表で使用している百分率(%)は、小数点第2位を四捨五入して算出している。四捨五入の結果、数値の和が100.0にならない場合がある。

調査設計

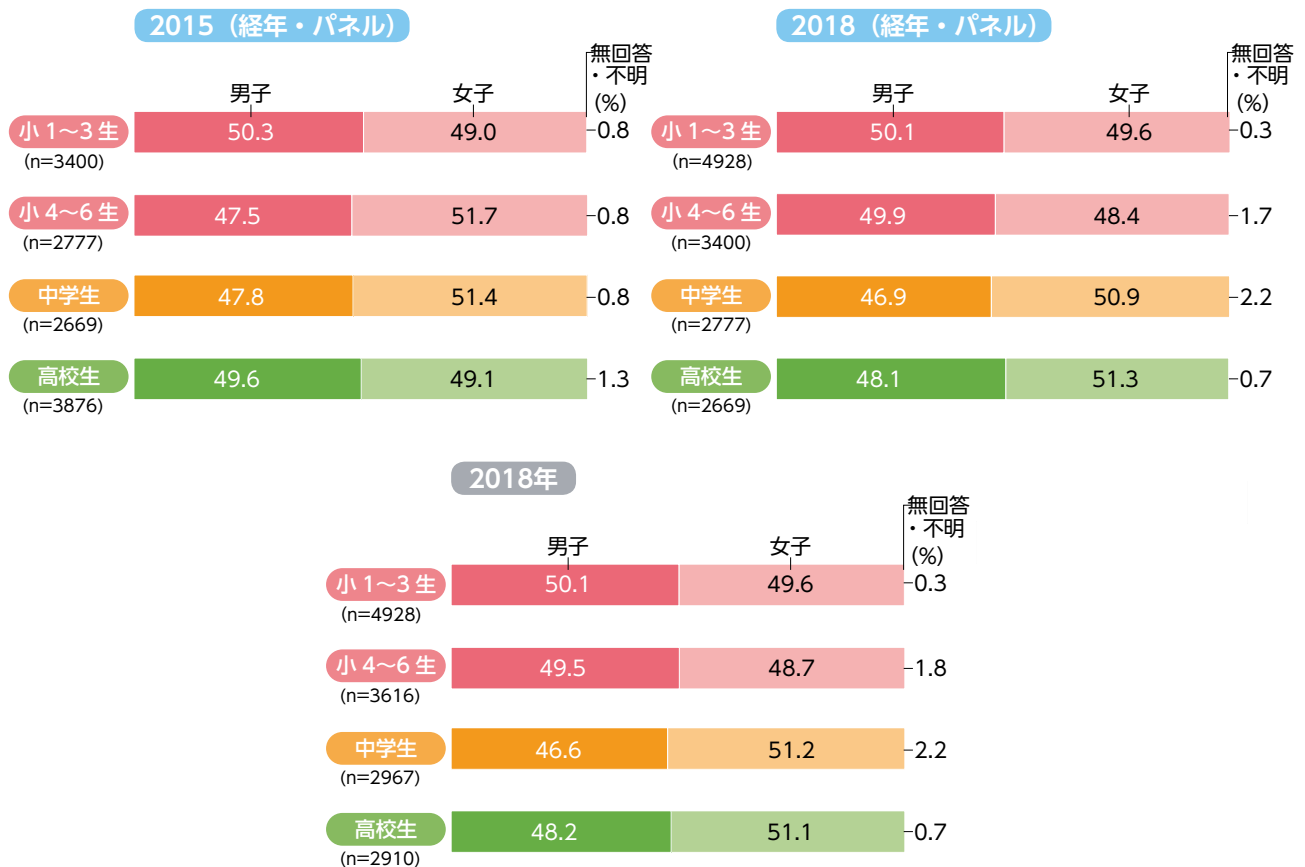
「子どもの生活・学習・人間関係」の意識・実態や「保護者の子育て・教育」の意識・実態が、「子どもが身につけている力」や「自立」の程度とどのように関連しているのか、また、それらが、高校卒業時点での「自立」にどのようにつながっていくのかを明らかにできる設計である。



※上記以外に、子どもの属性、保護者の属性に関する項目を尋ねている。
 ※小学1~3年生は、子どもの項目の一部を保護者が回答している。
 ※本ダイジェスト版に掲載している項目を太字で示している。

基本属性

●子どもの性別(学校段階別)



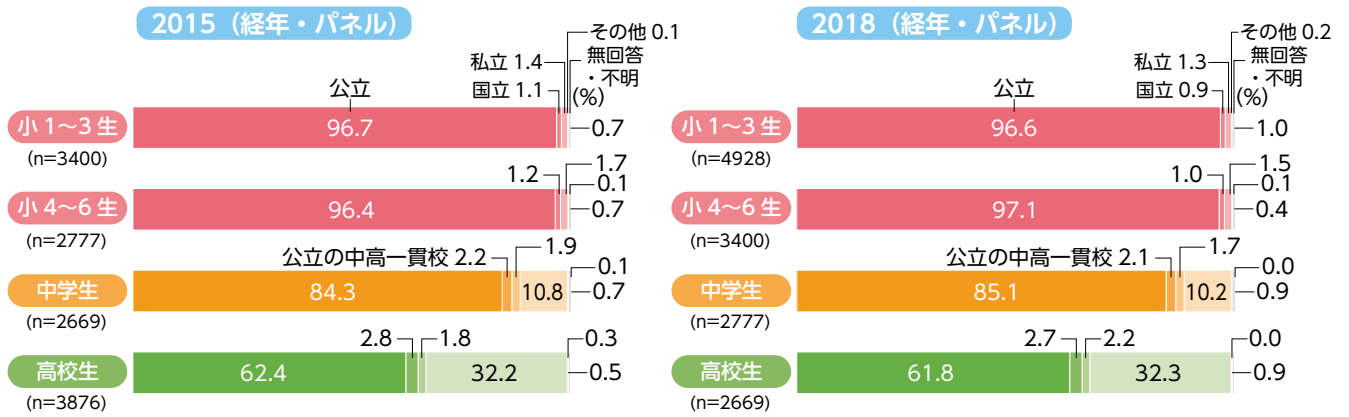
注1 小1~3生は保護者の回答。

注2 2015 (経年・パネル) は2015年の学年、2018 (経年・パネル) は2018年の学年。

注3 2018年 は単年度の数値。

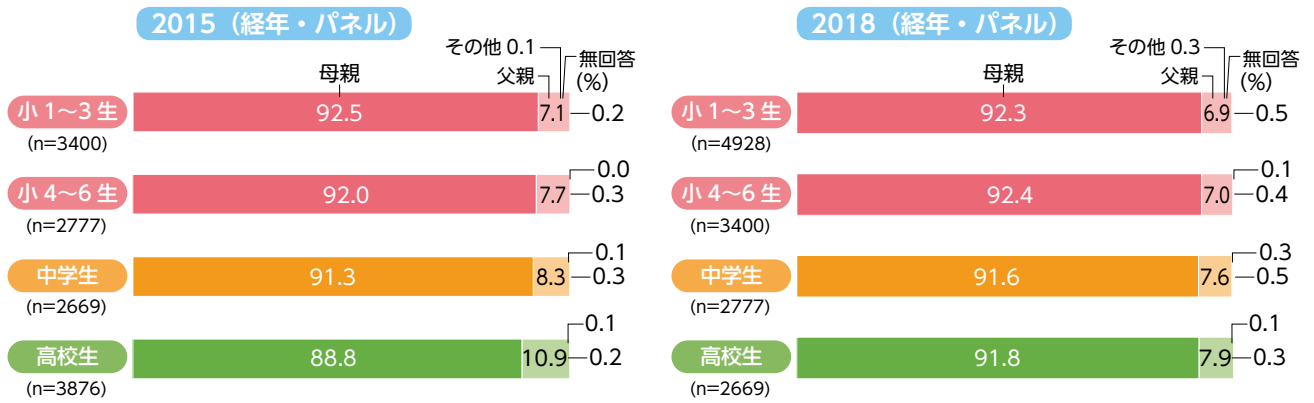
基本属性

●子どもが通っている学校の種類(学校段階別)



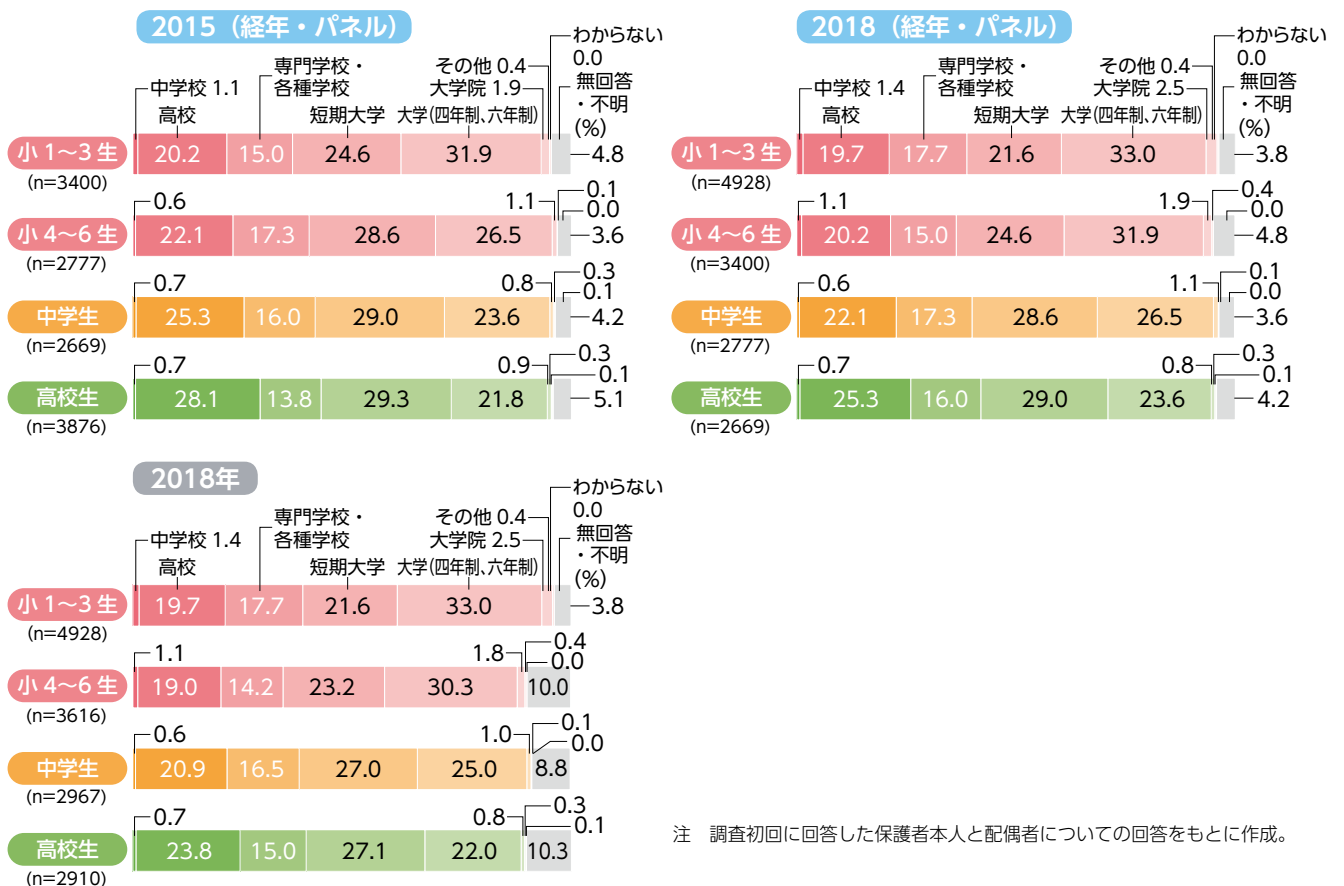
注 保護者の回答。

●保護者(回答者)と子どもとの続柄(学校段階別)



注1 「その他」は「祖母」+「祖父」+「その他」の%。 注2 保護者の回答。

●母親の最終学歴(学校段階別)



注 調査初回到答した保護者本人と配偶者についての回答をもとに作成。

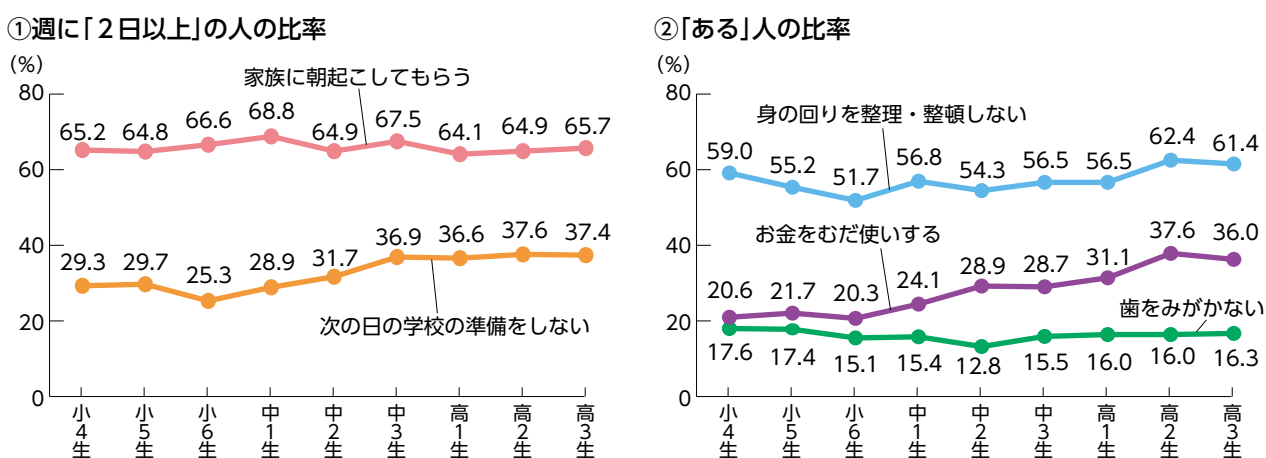
1. 子どもの生活実態の現状と変化 ①生活習慣

小学生のときに生活習慣が身についていた子どもほど、中学生になって計画的に勉強している

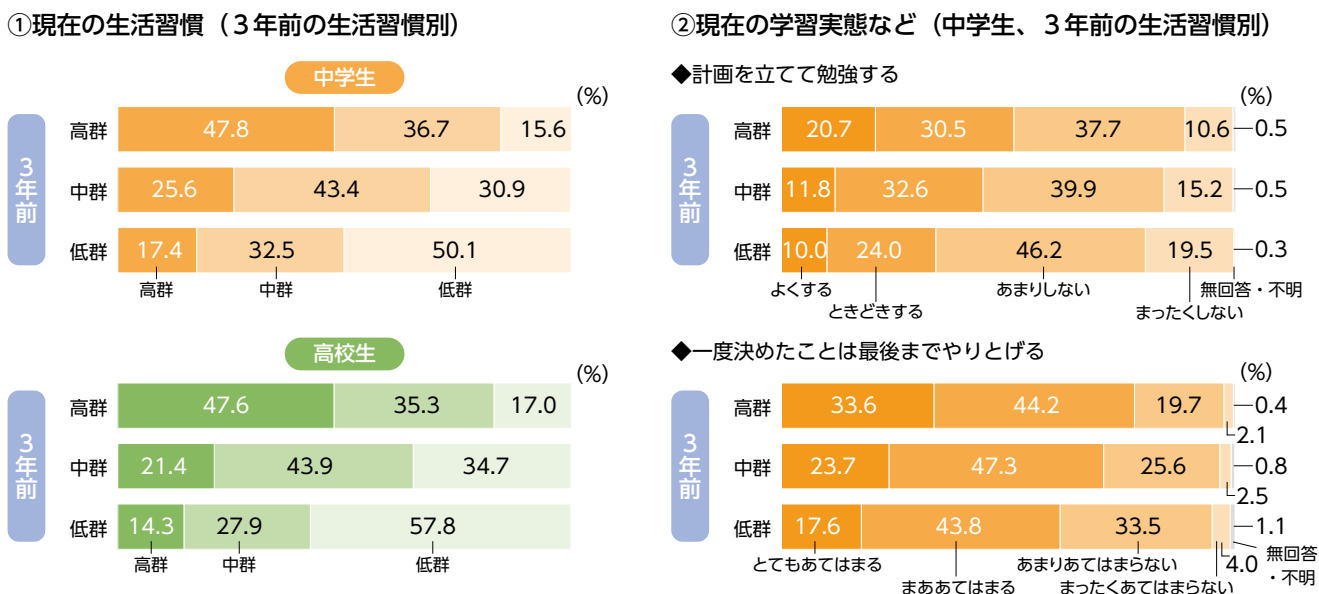
「家族に朝起こしてもらう」(6割台)、「身の回りを整理・整頓しない」(5～6割)、「歯をみがかない」(1割台)の比率は、小中高生の差が小さく、学年が上がっても比率は低下しない。また、「次の日の学校の準備をしない」「お金をむだ使いする」(ともに2～3割台)の比率は高校生ほど高い。3年前に生活習慣が身についていたかどうかと、現在の生活習慣や学習実態などとの関連をみると、3年前に生活習慣が身についていた子どもほど、現在も生活習慣があり、「計画を立てて勉強する」「一度決めたことは最後までやりとげる」の比率も高い。

Q ふだんの生活の様子について、次のようなことがどれくらいありますか。

子ども 2018 図 1-1 生活習慣(学年別)



子ども 2015-2018 図 1-2 3年前の生活習慣と現在の生活習慣・学習実態などとの関連 (2015年) (2018年)



注1 「週に4～5日」+「週に2～3日」の%。学校がある日のことを回答(図1-1①)。
 注2 「よくある」+「ときどきある」の% (図1-1②)。
 注3 2018年の学校段階。3年前、および現在の生活習慣の高群・中群・低群は、各年の図1-1の5項目の回答を得点化して(「週に4～5日」「よくある」1点～「まったくない」4点)合計し、人数で3等分したもの(図1-2)。
 注4 「計画を立てて勉強する」は「あなたは、勉強するときに、次のことをどれくらいしますか」への回答。「一度決めたことは最後までやりとげる」は「あなた自身のことについて、次のことはどれくらいあてはまりますか」への回答。3年前の成績別にみても同様の傾向(図1-2②)。

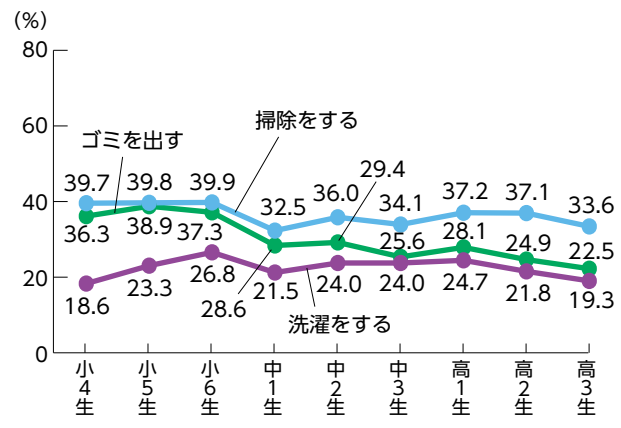
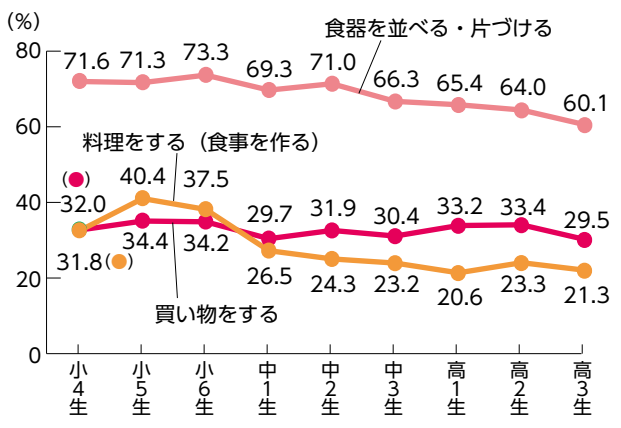
②家の仕事・お手伝い

小学生のときにお手伝いをしていた子どもほど、中学生で「自分でできることは自分です」と回答

お手伝いのうち、「買い物をする」(3割前後)、「掃除をする」(3割台)、「洗濯をする」(2割前後)の比率は、小中高生とも同程度である。一方で、小学生が比較的多く行っている「食器を並べる・片づける」(6～7割台)、「料理をする」(2～4割)、「ゴミを出す」(2～3割台)などのお手伝いは、中高生ほど比率が低い。3年前にお手伝いをしていたかどうかと、現在のお手伝いや生活実態との関連をみると、3年前にお手伝いをしていた子どもほど、現在もお手伝いをしており、「自分でできることは自分です」「グループがまとまるように協力する」の比率も高い。

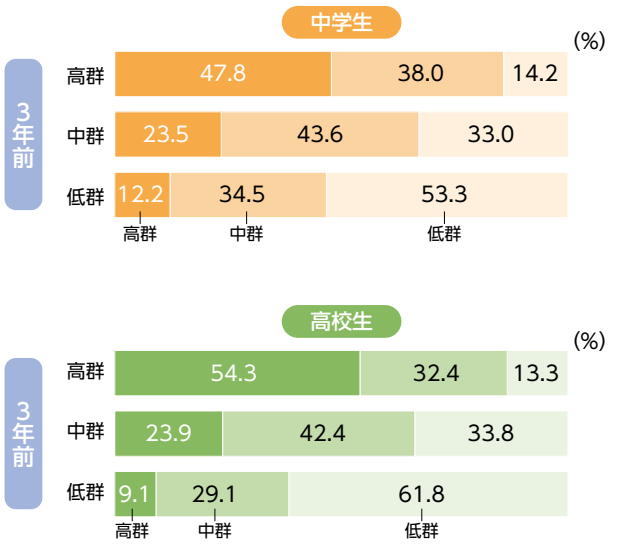
Q あなたは、次のような家の仕事やお手伝いをどれくらいしていますか。

子ども 2018 図1-3 家の仕事・お手伝い(学年別)

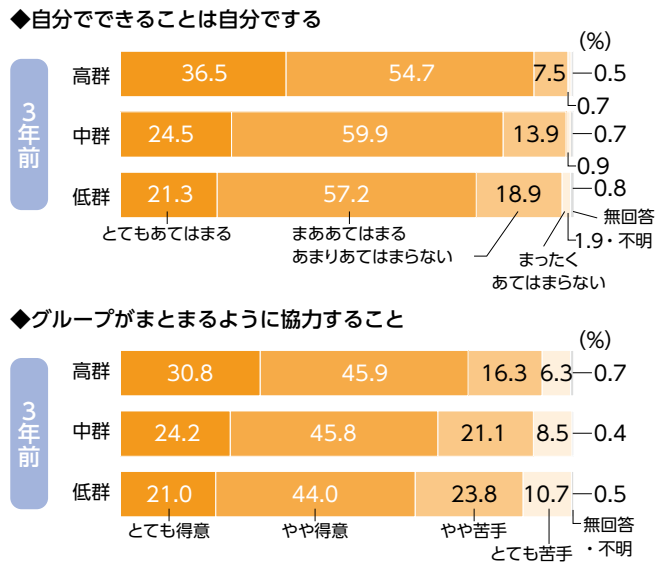


子ども 2015-2018 図1-4 3年前のお手伝いと現在のお手伝い・生活実態との関連 (2015年) (2018年)

①現在のお手伝い (3年前のお手伝い別)



②現在の生活実態 (中学生、3年前のお手伝い別)



注1 「よくする」+「ときどきする」の% (図1-3)。
 注2 2018年の学校段階。3年前、および現在のお手伝いの高群・中群・低群は、各年の図1-3の6項目の回答を得点化して(「まったくしない」1点～「よくする」4点)合計し、人数で3等分したもの(図1-4)。
 注3 「自分でできることは自分です」は「あなた自身のことについて、次のことはどれくらいあてはまりますか」への回答。「グループがまとまるように協力すること」は「あなたは次のことが得意ですか、苦手ですか」への回答。3年前の成績別にも同様の傾向(図1-4②)。

③メディア利用

自分専用のスマートフォンを使っている中学生が増加

ここ3年間のメディアの利用状況の変化をみると、スマートフォンは、「自分専用のものを使っている」の比率が中学生で18ポイント、小学生、高校生で5ポイント前後増加し、「使っていない」の比率が減少している。タブレットは、小学生で「自分専用のものを使っている」、小中高生で「家族といっしょに使っている」の比率が5ポイント強増加し、「使っていない」の比率が減少している。メディアの利用時間も、携帯電話・スマートフォンの時間は全学年で増加し(1日あたり7~19分増)、パソコン・タブレットの時間は小学生で増加している(1日あたり8~11分増)。

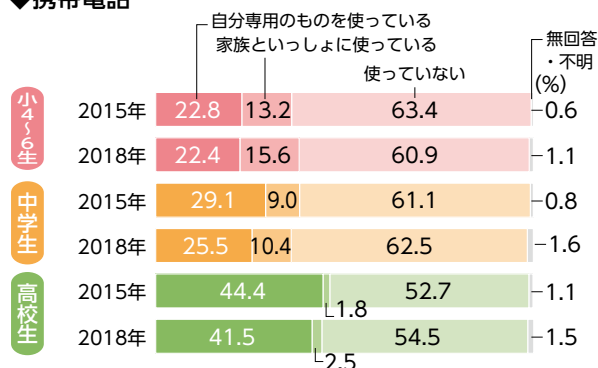


あなたは、次のような情報機器を、家で使っていますか。

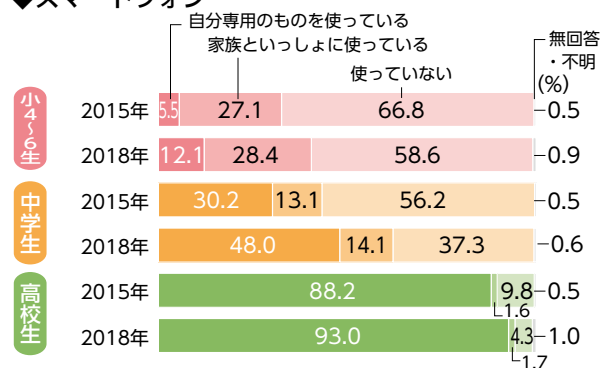
子ども 2015・2018

図1-5 メディアの利用状況の変化(学校段階別)

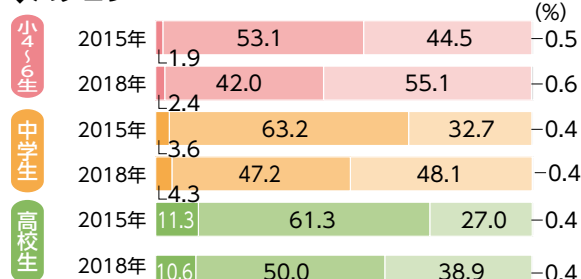
◆携帯電話



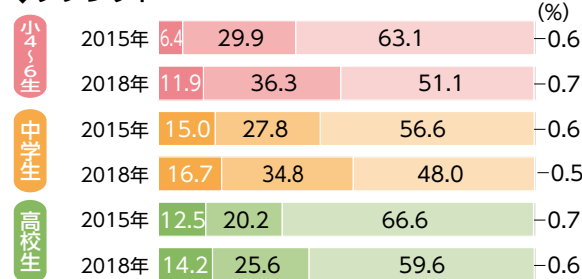
◆スマートフォン



◆パソコン



◆タブレット

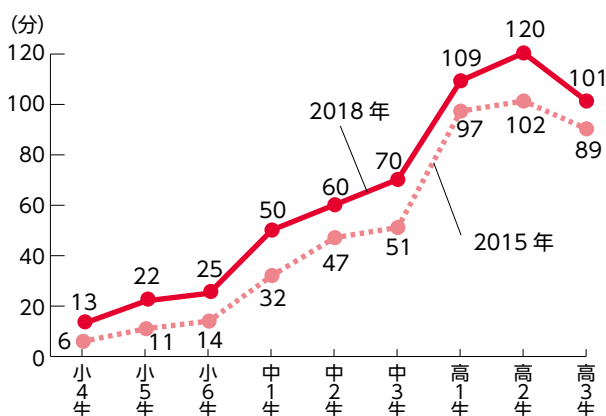


あなたはふだん(学校がある日)、次のことを、1日にどれくらいの時間やっていますか。

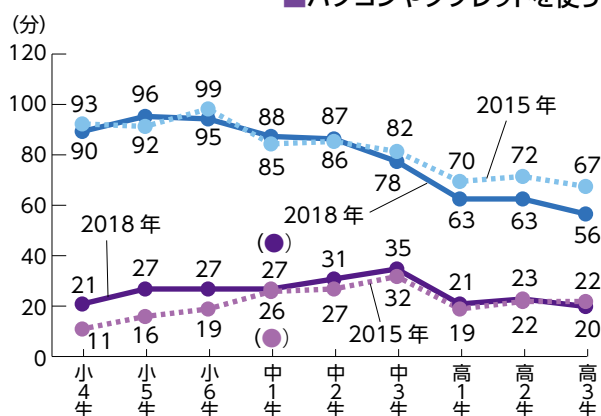
子ども 2015・2018

図1-6 メディアの利用時間の変化(学年別)

■携帯電話やスマートフォンを使う



■テレビやDVDを見る ■パソコンやタブレットを使う



注 学校の中でやる時間は除いて回答。平均時間は「しない」を0分、「5分」を5分、「4時間より多い」を300分のように置き換えて、無回答・不明を除いて算出している(図1-6)。

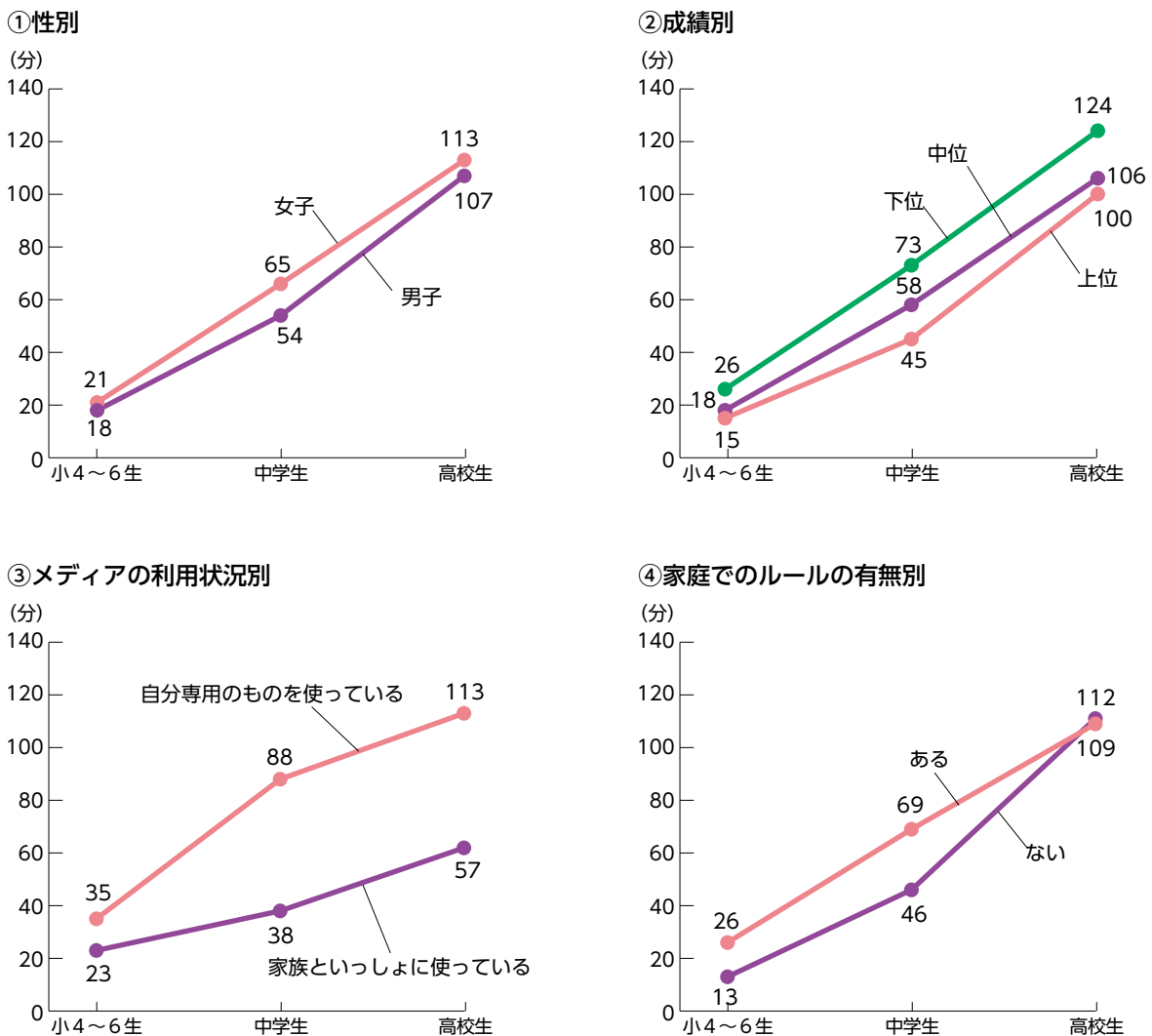
「自分専用」を使う中高生は、「家族といっしょに」使う中高生に比べて、携帯電話・スマートフォンの利用時間が1日あたり約50分長い

携帯電話・スマートフォンの利用時間は、性別では女子、成績別では成績下位の子どもの方が長い傾向にある。また、メディアの利用状況別では「自分専用のものを使っている」子どものほうが利用時間が長く、とくに中高生では、「家族といっしょに使っている」子どもに比べて1日あたり約50分長い。「携帯電話やスマートフォンの使い方」に関する家庭でのルールの有無別では、小中学生は、ルールが「ある」子どものほうが利用時間が長く、ルールを決めることで長時間になりがちな利用を調整していると思われる。



あなたはふだん(学校がある日)、次のことを、1日にどれくらいの時間やっていますか。

子ども 2018 図1-7 携帯電話・スマートフォンの利用時間(学校段階別)



注1 学校の中でやる時間は除いて回答。平均時間は「しない」を0分、「5分」を5分、「4時間より多い」を300分のように置き換えて、無回答・不明を除いて算出している(図1-7)。

注2 成績は子どもの回答(自己評価)。小4~6生は国算理社の4教科、中学生は国数理社英の5教科についてそれぞれ5段階で回答したものの総合得点を算出し、学校段階ごとに人数が均等になるように「上位」「中位」「下位」の3つに分類した(図1-7②)。

注3 「自分専用のものを使っている」は、図1-5のうち、「携帯電話」か「スマートフォン」のどちらか(あるいは両方)に「自分専用のものを使っている」と回答した人、「家族といっしょに使っている」は、それ以外の人のうち、「携帯電話」か「スマートフォン」のどちらか(あるいは両方)に「家族といっしょに使っている」と回答した人(図1-7③)。

注4 保護者に尋ねた「あなたのご家庭では、携帯電話やスマートフォンの使い方に関する約束やルールがありますか」という質問への回答を用いている(図1-7④)。

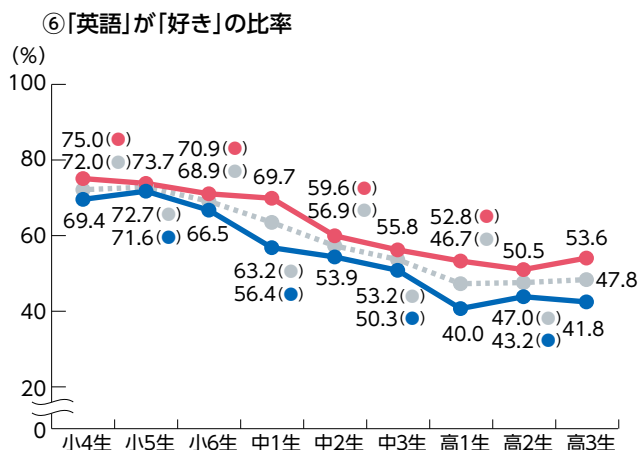
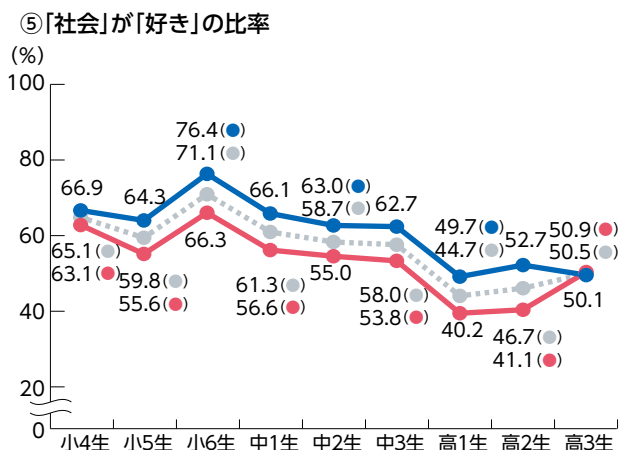
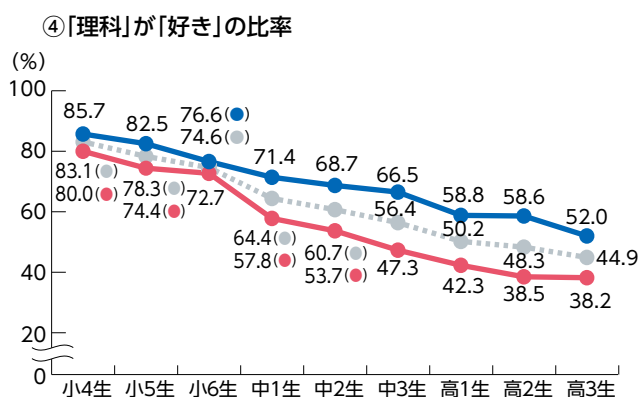
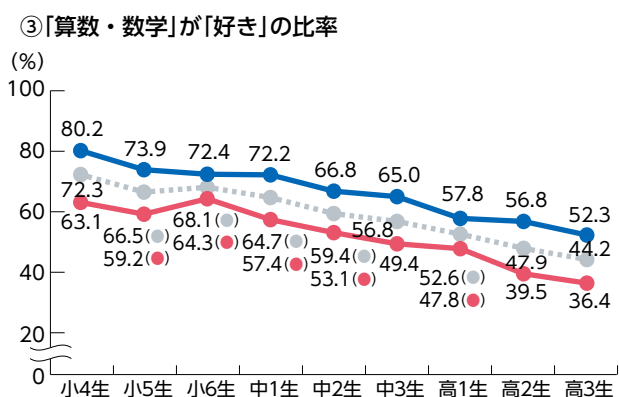
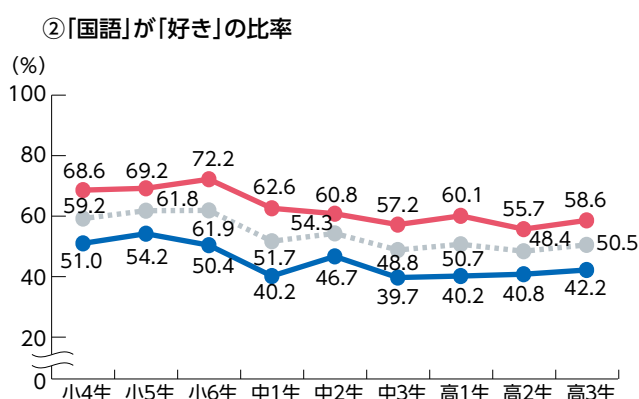
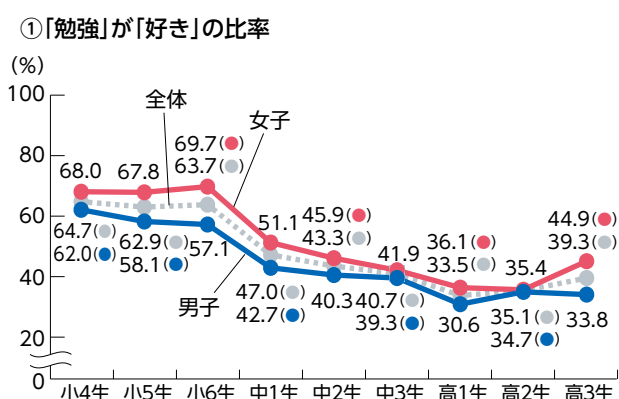
④勉強の好き嫌い、教科の好き嫌い

中学生以降、「理科」が「好き」な女子は、男子と比べて大きく減少

「勉強」が「好き」（「とても好き」+「まあ好き」）の比率は、男女によらず小6生から中1生にかけて大きく減少する（図1-8-①）。教科別に「好き」（「とても好き」+「まあ好き」）の比率をみると、「国語」や「英語」は、女子が男子よりも「好き」の比率が高く、「算数・数学」「理科」「社会」は、男子が女子よりも「好き」の比率が高い（図1-8-②～⑥）。特に、中学生以降、「理科」が「好き」という女子の比率は、男子と比べて大きく減少している（図1-8-④）。また、「英語」については、中1生や高1生で男子の「好き」の比率が、女子と比べて落ち込む傾向がみられる（図1-8-⑥）。

Q あなたは「勉強」がどれくらい好きですか。
あなたは、次の教科や時間がどれくらい好きですか。

子ども 2018 図1-8 「勉強」が「好き」、教科が「好き」の比率(全体、学年別・子どもの性別)



注1 「とても好き」+「まあ好き」の% (図1-8①～⑥)。
注2 無回答・不明を除いた上で算出している(図1-8①～⑥)。

⑤部活動

中高生とも、週7日(毎日)部活動に参加する比率が減少

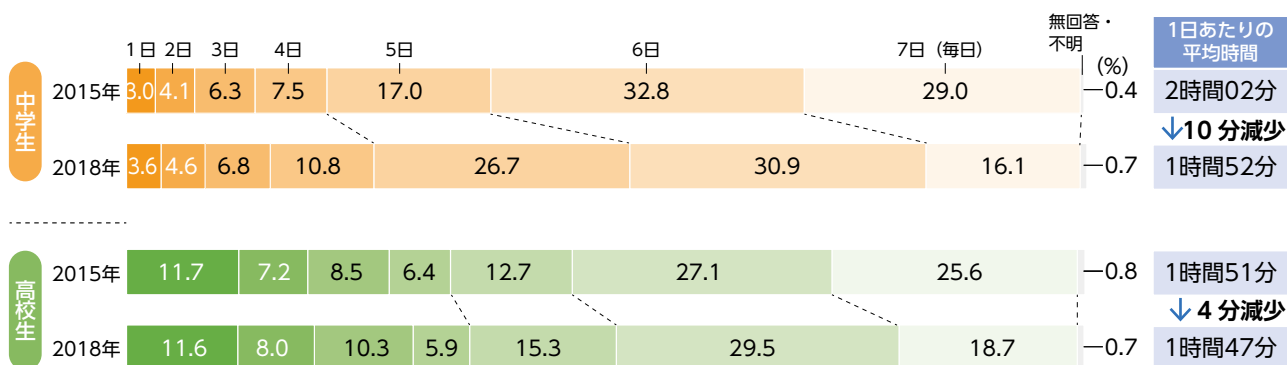
週あたりの部活動の日数をたずねたところ、「7日(毎日)」の比率が、中学生では12.9ポイント(2015年：29.0%→2018年：16.1%)、高校生では6.9ポイント(2015年：25.6%→2018年：18.7%)と大きく減少している(図1-9)。加えて、1日あたりの部活動の平均時間は、中学生で10分減少(2015年：2時間02分→2018年：1時間52分)、高校生で4分減少(2015年：1時間51分→2018年：1時間47分)であった。以上から、2015年から2018年にかけて、週あたりの日数と1日あたりの時間の両方が減少し、中高生が部活動に割く時間が大幅に減少したことがわかる。一方で、「部活動が楽しい」と回答した子どもの比率は、中高生とも減少傾向であった。



部活動には、1週間に何日くらい参加していますか。

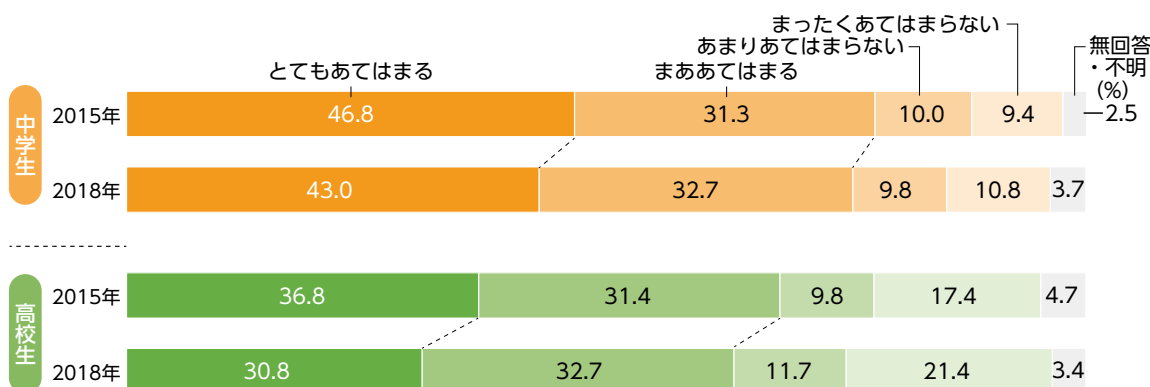
部活動は、1日にどれくらいの時間やっていますか。平均していただきたいの時間を教えてください。

子ども2015・2018 図1-9 部活動の週あたりの日数と1日あたりの平均時間(学級段階別)



学校生活について、次のようなことはどれくらいあてはまりますか。

子ども2015・2018 図1-10 「部活動が楽しい」の比率(学校段階別)



注1 対象は、部活動に加入している中高生のみ(図1-9、10)。

注2 部活動の「1日あたりの平均時間」は、「30分」を30分、「1時間」を60分、「4時間」を240分、「4時間より多い」を270分などと置き換えて、無回答・不明を除いたうえで算出した(図1-9)。

⑥自分について

小中学生の自己肯定感は経年で上昇するも、回復力(失敗しても自信を取り戻せる)は全体的に低下傾向

「自分の良いところが何かを言うことができる」に「とてもあてはまる」と回答した比率は、小4～6生と中学生で5ポイント以上増加しており、小中学生の「自己肯定感」は上昇傾向にある。一方で、「失敗しても自信を取り戻せる」(「とてもあてはまる」+「まああてはまる」)比率は、小中高生とも、5ポイント前後減少していることから、失敗に直面した際の「回復力」は、全体的に低下傾向である。次に、2015年に「自己肯定感」がある と回答した小中学生を、「回復力あり」と「回復力なし」の2グループにわけて、2018年の「自己肯定感あり」の比率を比べたところ、「回復力あり」が「なし」よりも10ポイント以上高いことがわかった。



あなた自身のことについて、次のようなことはどれくらいあてはまりますか。

子ども 2015・2018

図1-11-1 「自分の良いところが何かを言うことができる」(自己肯定感) (学校段階別)

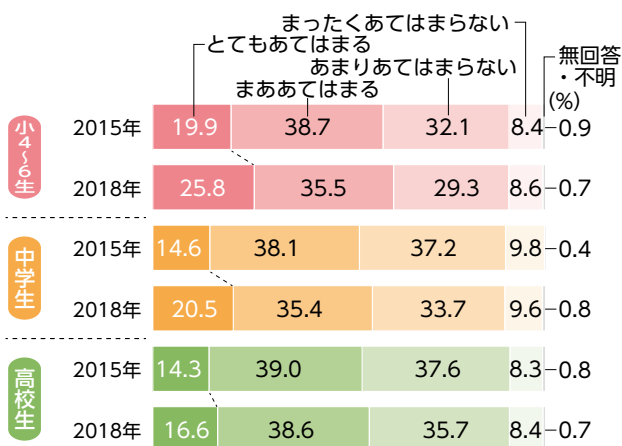
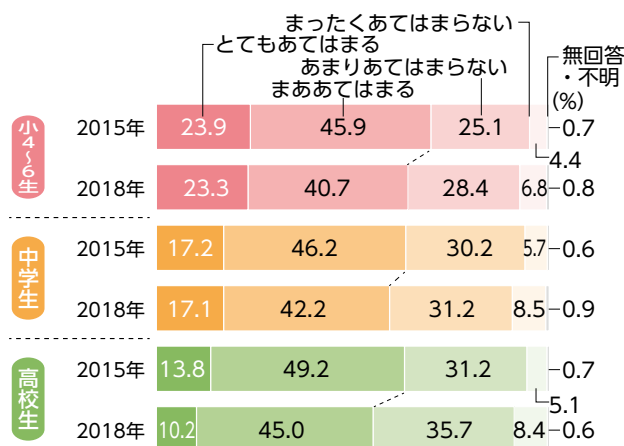


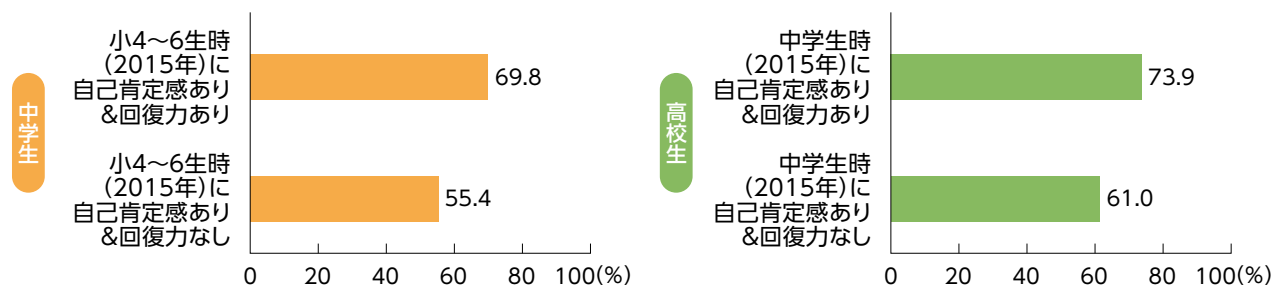
図1-11-2 「失敗しても自信を取り戻せる」(回復力) (学校段階別)



あなた自身のことについて、次のようなことはどれくらいあてはまりますか。

子ども 2015-2018

図1-12 「自分の良いところが何かを言うことができる」(自己肯定感あり)の比率(学校段階別、2018年)



注 「自分の良いところが何かを言うことができる」と回答した比率(「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%)を「自己肯定感あり」、「失敗しても自信を取り戻せる」に肯定的に回答した比率(「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%)を「回復力あり」、否定的に回答した比率(「あまりあてはまらない」+「まったくあてはまらない」の%)と「回復力なし」と表記している(図1-12)。

母親が就業していたかどうかは、子どもの成績・自己肯定感・回復力の変化に対して、決まった影響を与えない

母親の学歴や就業は、子どもの成績や自己肯定感、回復力の変化とどんな関係にあるのだろうか。母親が大卒か否かで、「上昇」した比率と「下降」した比率が5ポイント以上差がついたのは、中学生から高校生にかけての「成績の変化」のみであった。一方、母親の就業の有無で、「上昇」した率が5ポイント以上差がついたのも、中学生から高校生にかけての「成績の変化」のみであった。「自己肯定感の変化」および「回復力の変化」については、母親の学歴や就業で差がつかなかった。全体的に、母親が就業していたかどうかは、子どもの状況に対して大きな影響を与えないようだ。

Q あなた自身のことについて、次のようなことはどれくらいあてはまりますか。

子ども2015-2018

図1-13-1 「成績の変化」(母学歴別、2015年の母就業の有無別、2015年→2018年)

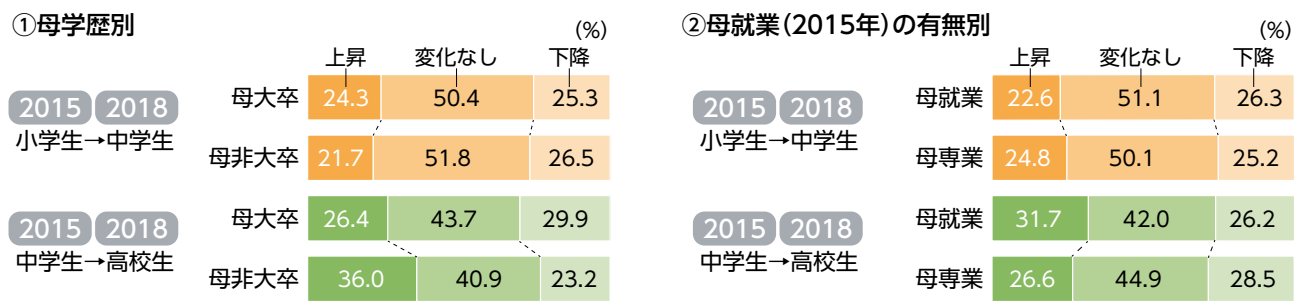


図1-13-2 「自己肯定感の変化」(母学歴別、母就業の有無別、2015年→2018年)

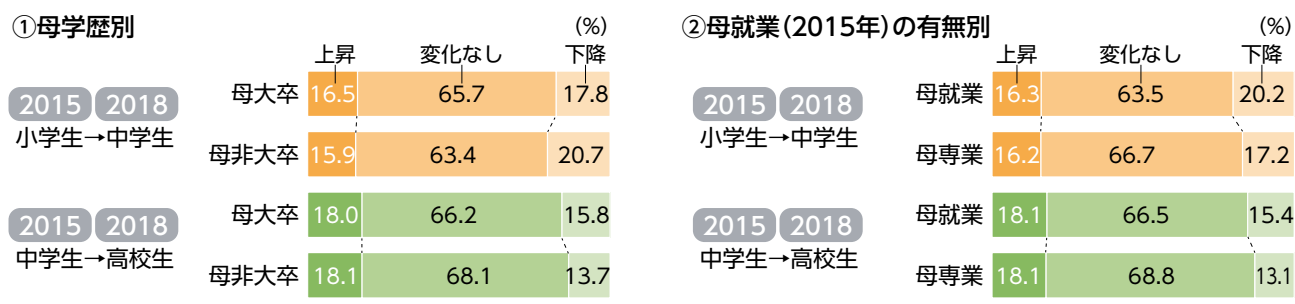
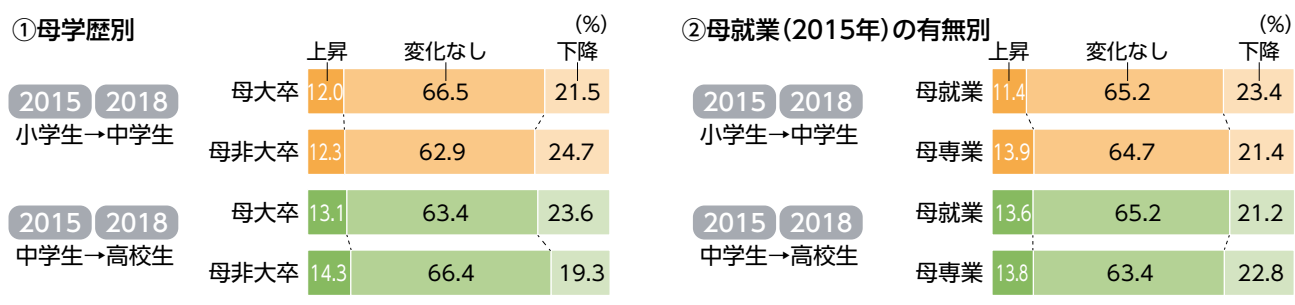


図1-13-3 「回復力の変化」(母学歴別、母就業の有無別、2015年→2018年)



注1 2015年の「小学生」は「小4～6生」を示している(図1-13-1～3)。
 注2 「成績の変化」は、2015年・2018年にそれぞれたずねた成績の自己評価を、学校段階別に高い人から順にサンプル数ができるだけ均等になるように3グループに分け、調査時点間の差(変化)をとることにより、「上昇」「変化なし」「下降」の3グループに分類したもの(図1-13-1)。
 注3 「自己肯定感」「自分の良いところが何かを言うことができる」「回復力」(「失敗しても自信を取り戻せる」)の変化は、2015年・2018年にそれぞれたずねた自己評価を「あり」「なし」とに分け、時点間の差(変化)をとることにより、「上昇」「変化なし」「下降」の3グループに分類したもの(図1-13-2,3)。

2. 親子のかかわりの変化 ①母親の就業

3年前に比べ、母親の就業率は高まっている

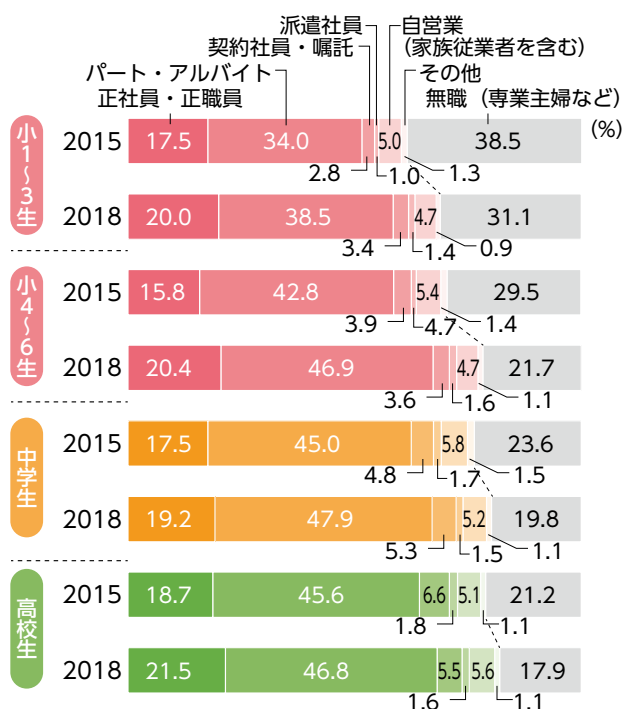
母親の就業形態をみると、どの学校段階でも無職(専業主婦など)が減少し、正社員・正職員、パート・アルバイトが増加している(図2-1)。就業時間も同様の傾向が見られ、パートタイム、フルタイムが増えている(図2-2)。個人の就業変化をみると、「小1~3生→小4~6生」の時期に約2割の母親が働き始めており、「有職のまま」「有職へ」を合わせると約8割の母親が就業している(図2-3)。



あなたと配偶者について、現在の仕事(就業時間と就業形態)について教えてください。

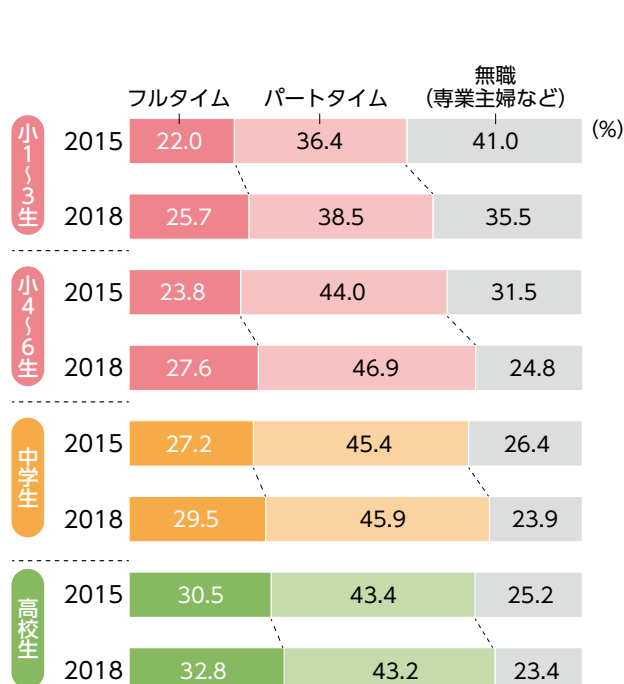
保護者 2015・2018

図2-1 母親の就業形態の変化(学校段階別)



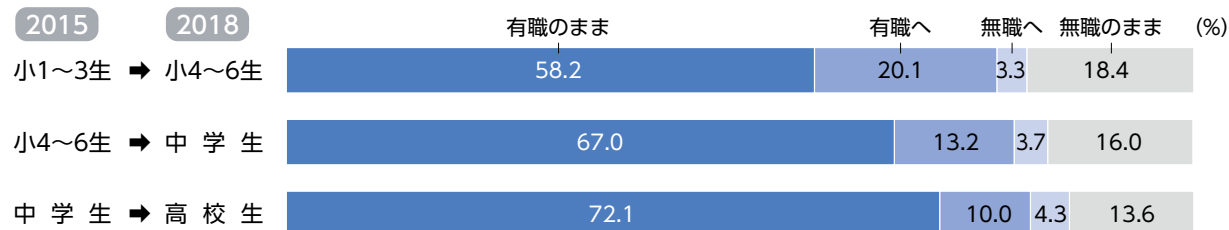
保護者 2015・2018

図2-2 母親の就業時間の変化(学校段階別)



保護者 2015-2018

図2-3 母親の就業推移(学校段階別)



注1 母親の就業形態、就業時間の%は、「わからない」や無回答・不明は除外して算出している(図2-1,2)。

注2 母親の就業区分は、就業形態、就業時間に関わらず働いている人を「有職」、無職(専業主婦など)を「無職」とし、2015年と2018年の2時点で同じ保護者の変化をみた(図2-3)。

②母親の就業と親子のかかわり

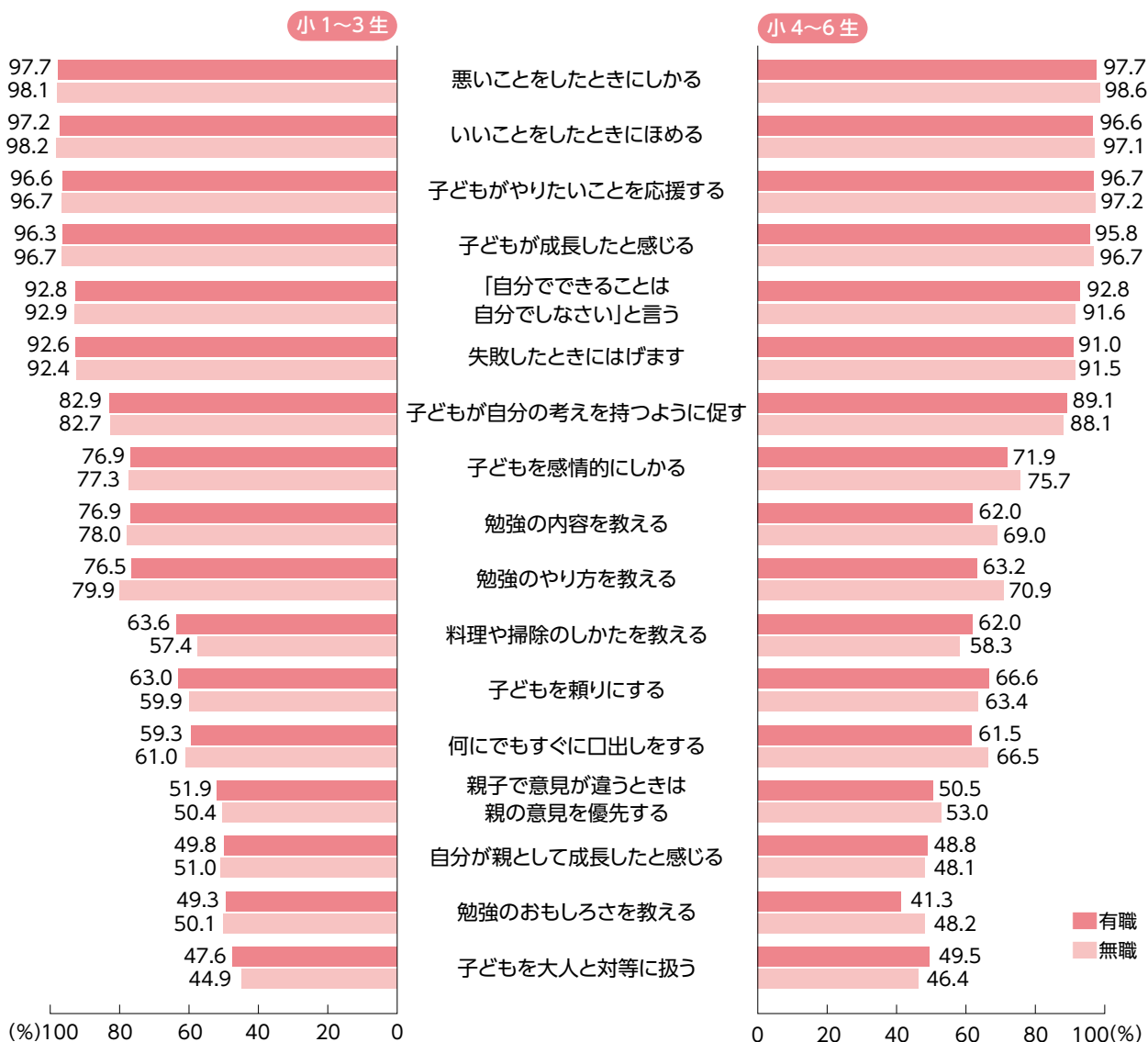
小1～3生に比べて、小4～6生では、母親の就業有無別で子どもへの関わり方に違いがみられる

子どもへの関わり方をたずねた多くの項目において、小1～3生では就業の有無による差はあまりみられないが、「料理や掃除の仕方を教える」は、有職の母ほど伝えている(約6ポイント差)。小4～6生では、「勉強の内容を教える」「勉強のやり方を教える」「勉強のおもしろさを教える」に回答する割合は、無職(専業主婦など)の母ほど伝えている(約7ポイント差)。一方、「料理や掃除の仕方を教える」「子どもを頼りにする」「子どもを大人と対等に扱う」のような生活の自立に関わる項目は、有職の母の方が高い。



あなたのお子様に対するかかわりについて、次のことはどれくらいあてはまりますか。

保護者 2018 図2-4 子どもとのかかわり(母親の就業別)【小学生のみ】



注1 「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の% (図2-4)。

注2 母親の就業区分は、就業形態、就業時間に関わらず働いている人は「有職」とし、無職(専業主婦など)を「無職」としている。

③大切さを伝えていること

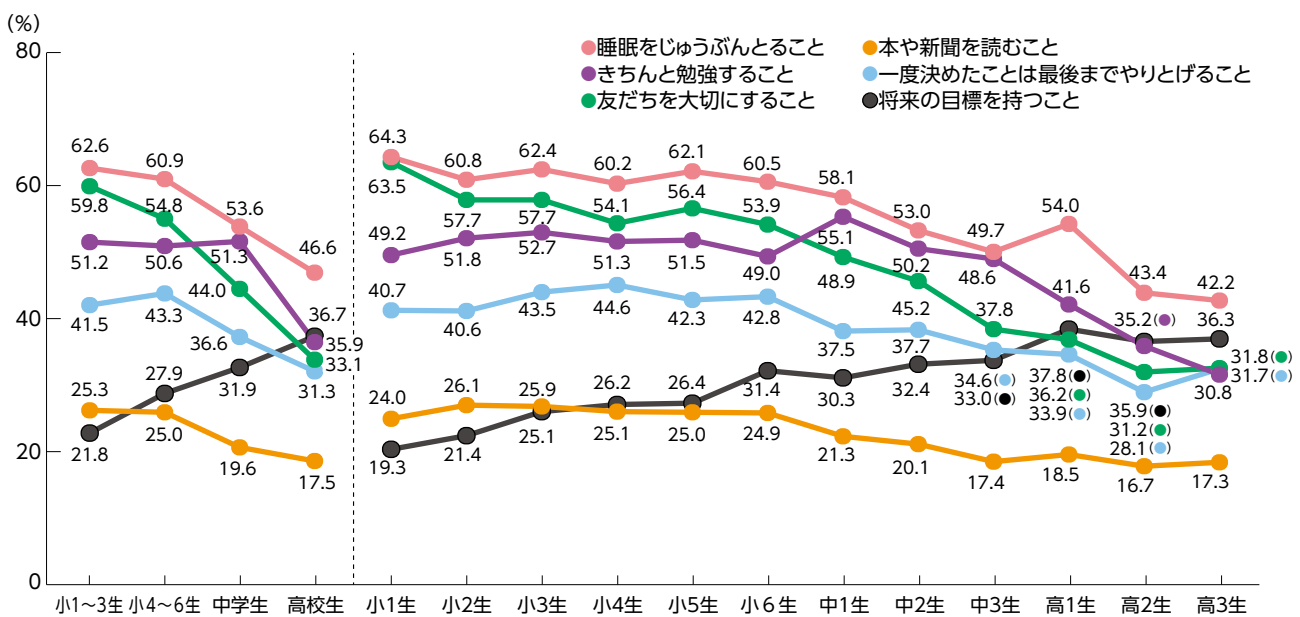
学年が上がるにつれ「家庭教育の中で伝えること」は減少するが、「将来の目標をもつこと」は、中高生で増加する

学年が上がるにつれ、保護者が「家庭教育の中で大切さを伝えること」は減少する傾向にあるが、接続期で大切さを再確認する項目も見られた(中1生では「きちんと勉強すること」、高1生では「睡眠をじゅうぶんとすること」が上昇)(図2-5)。また、2015年に保護者が「将来の目標をもつこと」の大切さを伝えている子どもほど、「入るのが難しいと言われる高校(大学)に入りたい」や「なりたい職業がある」の比率が高い(図2-6/2-7)。



家庭教育の中で、あなたはお子様に、次のこと大切さをどれくらい伝えていますか。

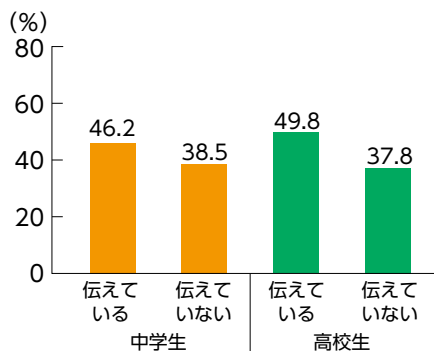
保護者 2018 図2-5 家庭教育の中で伝えていること(学校段階別、学年別)



保護者：家庭教育の中で、あなたはお子様に、「将来の目標を持つこと」の大切さをどれくらい伝えていますか。
 子ども：①入るのが難しいと言われる高校(大学)に入りたいですか。
 ②あなたには、将来なりたい職業(やりたい仕事)はありますか。

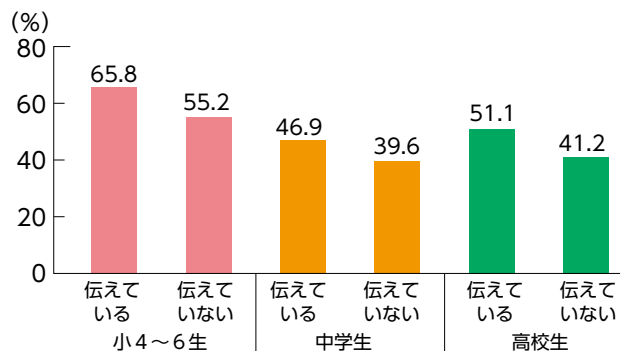
保護者 2015-子ども 2018

図2-6 ①子どもの進路挑戦
 (学校段階別・2015年の保護者の「将来の目標を持つこと」の大切さを伝える/伝えない別)



保護者 2015-子ども 2018

図2-7 ②なりたい職業が「ある」の比率
 (学校段階別・2015年の保護者の「将来の目標を持つこと」の大切さを伝える/伝えない別)



注1 「よく伝えている」の% (図2-5)。

注2 入るのが難しいと言われる高校(大学)に入りたいの「あてはまる」の%、中学生・高校生のみ回答(図2-6)。

注3 なりたい職業が「ある」の% (図2-7)。

注4 保護者には「将来の目標を持つ」大切さを伝えているとたずねた質問で、「よく伝えている」「ときどき伝えている」を「伝えている」、「あまり伝えていない」「まったく伝えていない」を「伝えていない」とし、無回答・不明は除外している(図2-6,7)。

3. 保護者の教育実態の変化 ①教育情報源

保護者は教育に関する情報を、身近な人やインターネットの情報サイトから得ている

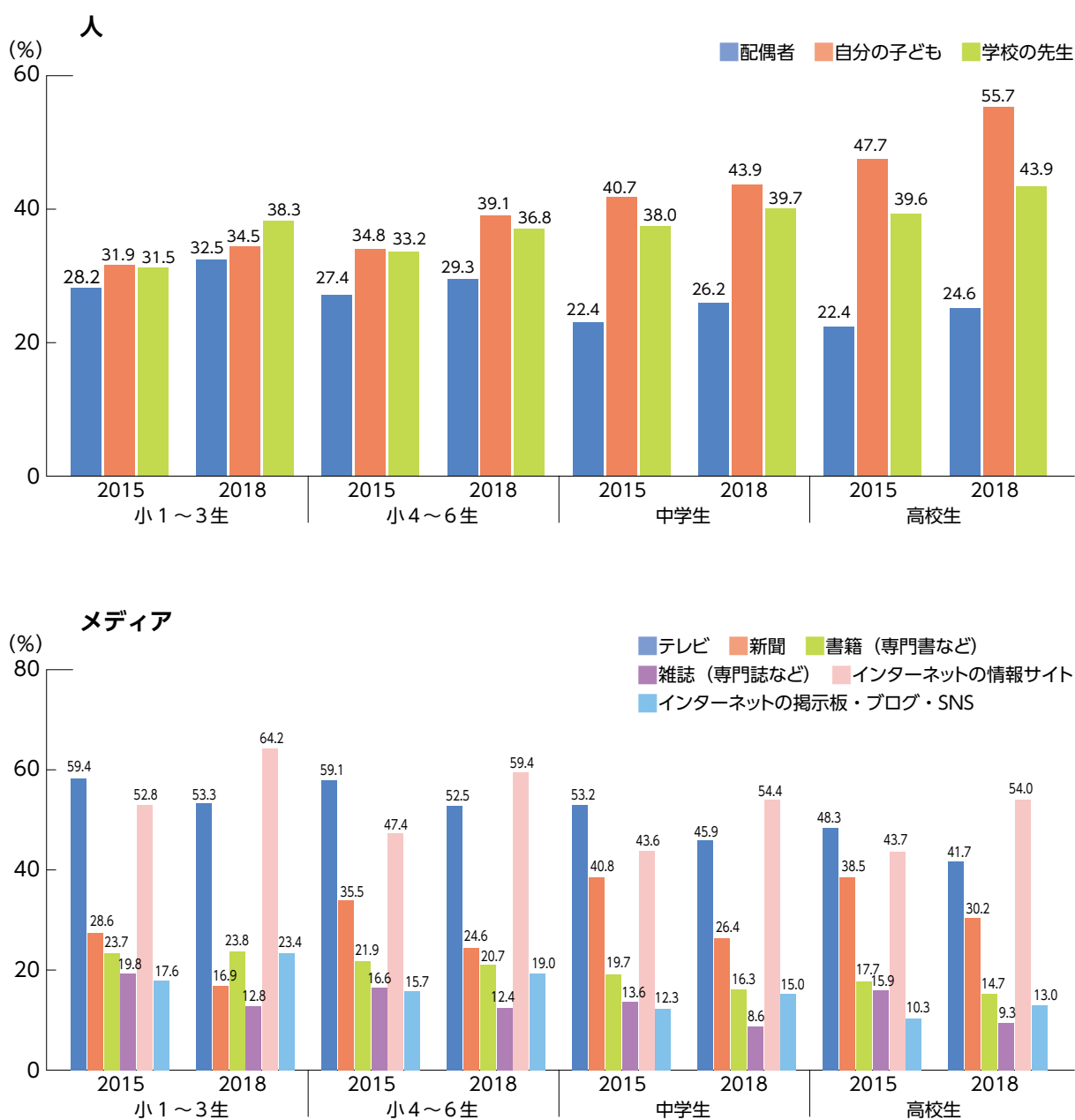
子育てや教育についての情報をどこから得ているかをたずねた項目では、2018年では「配偶者」「自分の子ども」「学校の先生」と回答した割合が2015年に比べて高い。学校段階が上がるにつれ、「配偶者」からの情報は減少する一方で、「自分の子ども」は増加している。また、情報源となるメディアでは、2015年に比べて2018年ではテレビ、新聞、雑誌から得る情報は減り、インターネットの情報サイト利用が大幅に増えている。



あなたは日ごろ、お子様の子育てや教育についての情報を、どこから(だれから)得ていますか。

保護者 2015・2018

図3-1 子育てや教育に関する「情報源」の変化(学校段階別)



注1 複数回答。

注2 2015年と2018年で特に変化がみられた項目を取り上げた(図3-1)。

②教育費

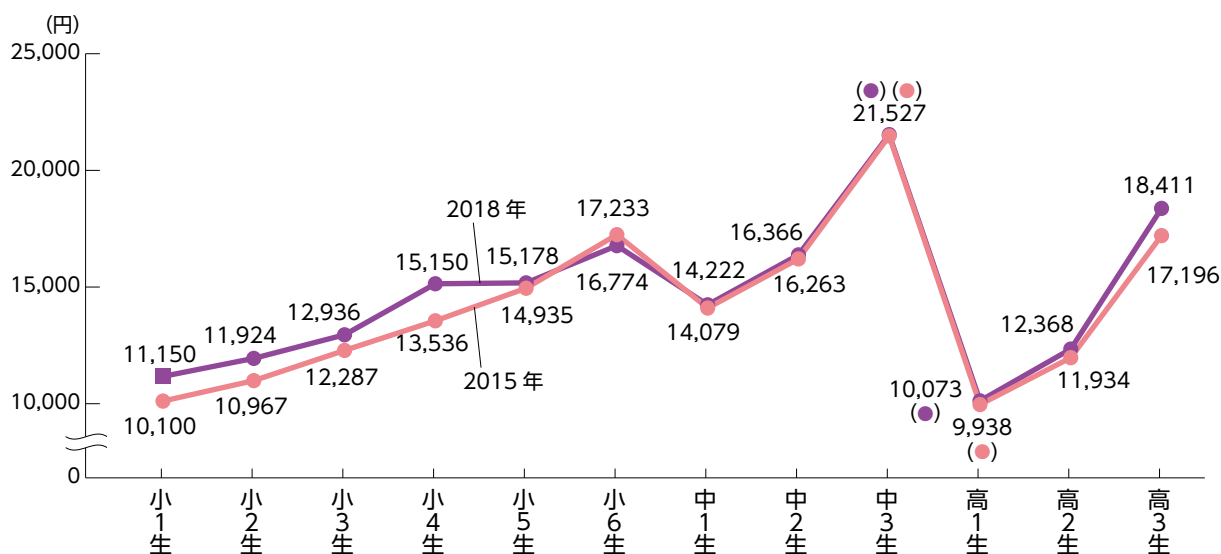
子ども1人あたりの教育費は増加している

2015年に比べ2018年の教育費は、小学校1年生の時期から高く、最も増加しているのは小4生である(約1600円の差)。小6生以降の学年では、経年による差はあまりみられない(図3-2)。小学生の低学年段階から教育費が上がっている要因の1つには、世帯年収800万円以上の家庭の教育費が増加していることが考えられる(図3-3)。

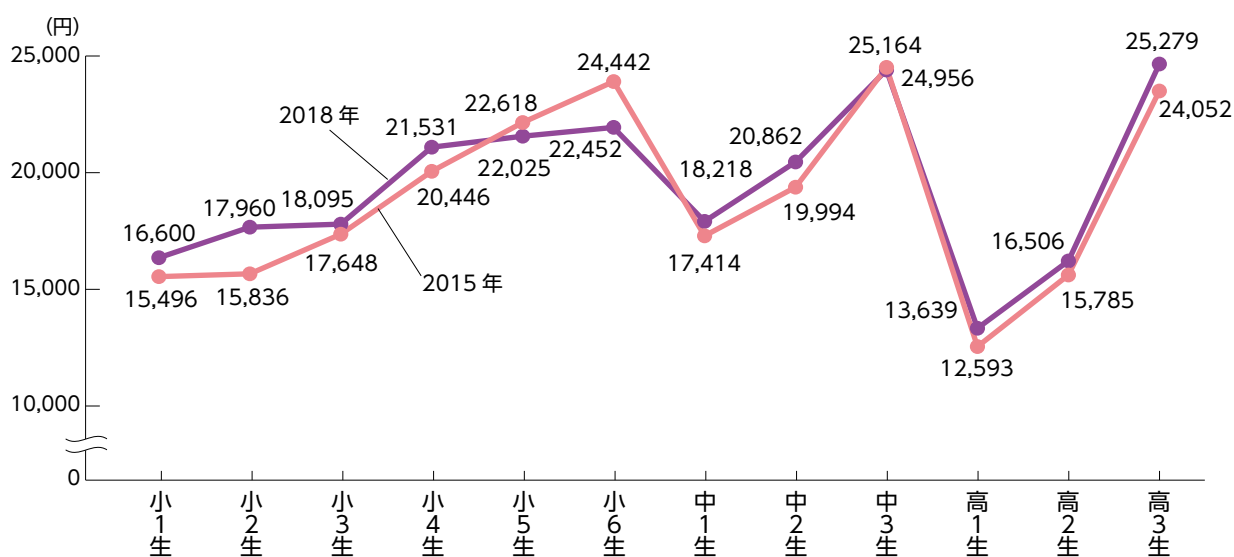


ご家庭の教育費はどれくらいですか(習い事や学習塾の費用、教材費などの合計)。
お子様1人の金額を、月平均でお答えください。

保護者 2015・2018 図3-2 子ども1人あたりの教育費の変化(学年別/平均額)



保護者 2015・2018 図3-3 世帯年収800万円以上における子ども1人あたりの教育費の変化(学年別、世帯年収別/平均額)



注1 平均金額は「1,000円未満」を500円、「1,000～2,500円未満」を1,750円、「4,000～50,000円未満」を45,000円、「50,000円以上」を55,000円のように置き換え、無回答・不明を除いて算出した(図3-2.3)

注2 世帯年収は「世帯全体の収入(共働きの場合は夫婦の合計)はどれくらいですか。ボーナスなどを含めて、昨年1年間のだいたいの収入を税込みで教えてください。」と尋ねたもの。「答えたくない」および「無回答」・「不明」は除いている(図3-3)。

③習い事

学校段階が上がるにつれ、習い事をする比率が低下

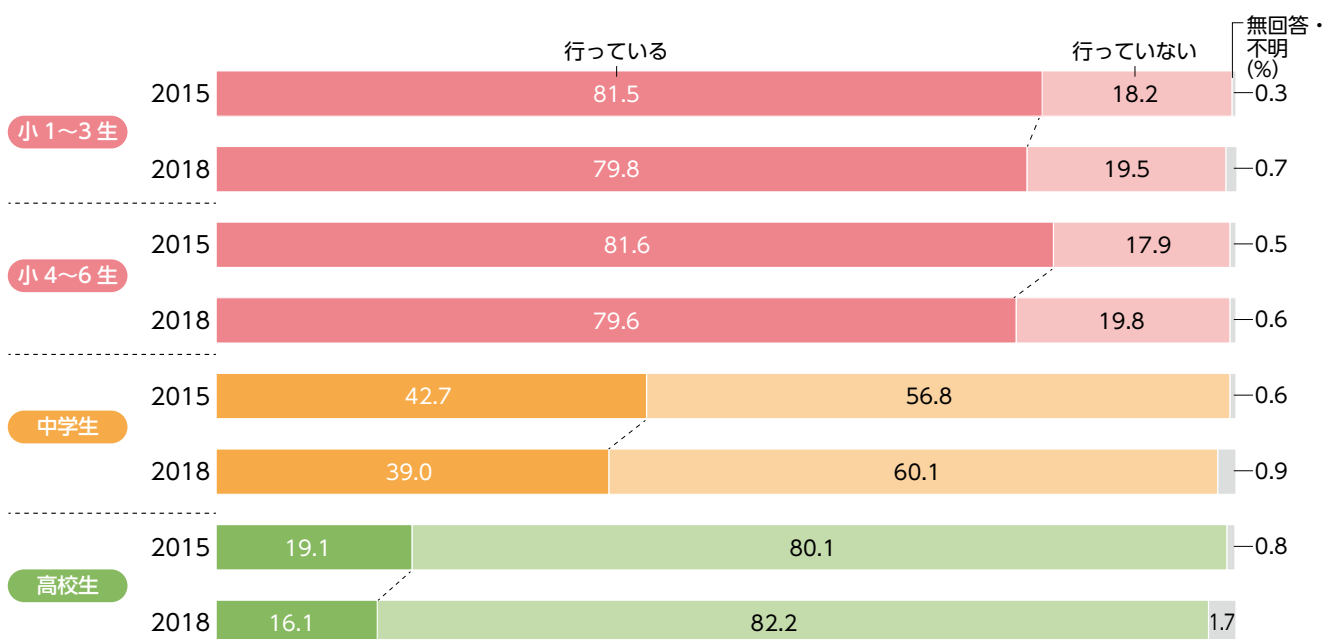
習い事をしている子どもの割合は、小学生は8割いるが、中高生は低い。また経年変化で見ると、中学生、高校生で習い事に行く比率は下がっている(図3-4)。習い事に通う比率が高い小学生では、男子ではスイミング、サッカーのような運動系を好み、女子は楽器・音楽教室のような文化系の習い事を好んでいる(表3-1)。



Q お子様は現在、学校外の習い事やスポーツクラブに行っていますか。
(部活動、学習塾は除きます。)

保護者 2015・2018

図3-4 習い事の変化 (学校段階別)



子ども 2018

表3-1 習い事のランキング(学校段階別、性別)【小学生のみ】

	小1~3生		小4~6生	
	男子	女子	男子	女子
第1位	スイミング(45.4%)	楽器・音楽教室(37.7%)	スイミング(29.3%)	楽器・音楽教室(35.0%)
第2位	サッカー(17.3%)	スイミング(37.1%)	サッカー(19.1%)	習字・硬筆(22.6%)
第3位	英会話・英語教室(16.3%)	英会話・英語教室(21.1%)	英会話・英語教室(15.2%)	スイミング(18.7%)
第4位	楽器・音楽教室(13.2%)	習字・硬筆(17.6%)	楽器・音楽教室(12.3%)	英会話・英語教室(17.8%)
第5位	体操・運動遊び(11.8%)	体操・運動遊び(11.7%)	習字・硬筆(11.1%)	そろばん(10.7%)

注1 複数回答。習い事の種類の横にある%は、該当者の割合(図3-5)。

注2 習い事やスポーツクラブに「行っていない」と無回答・不明を含めて算出した(表3-1)。

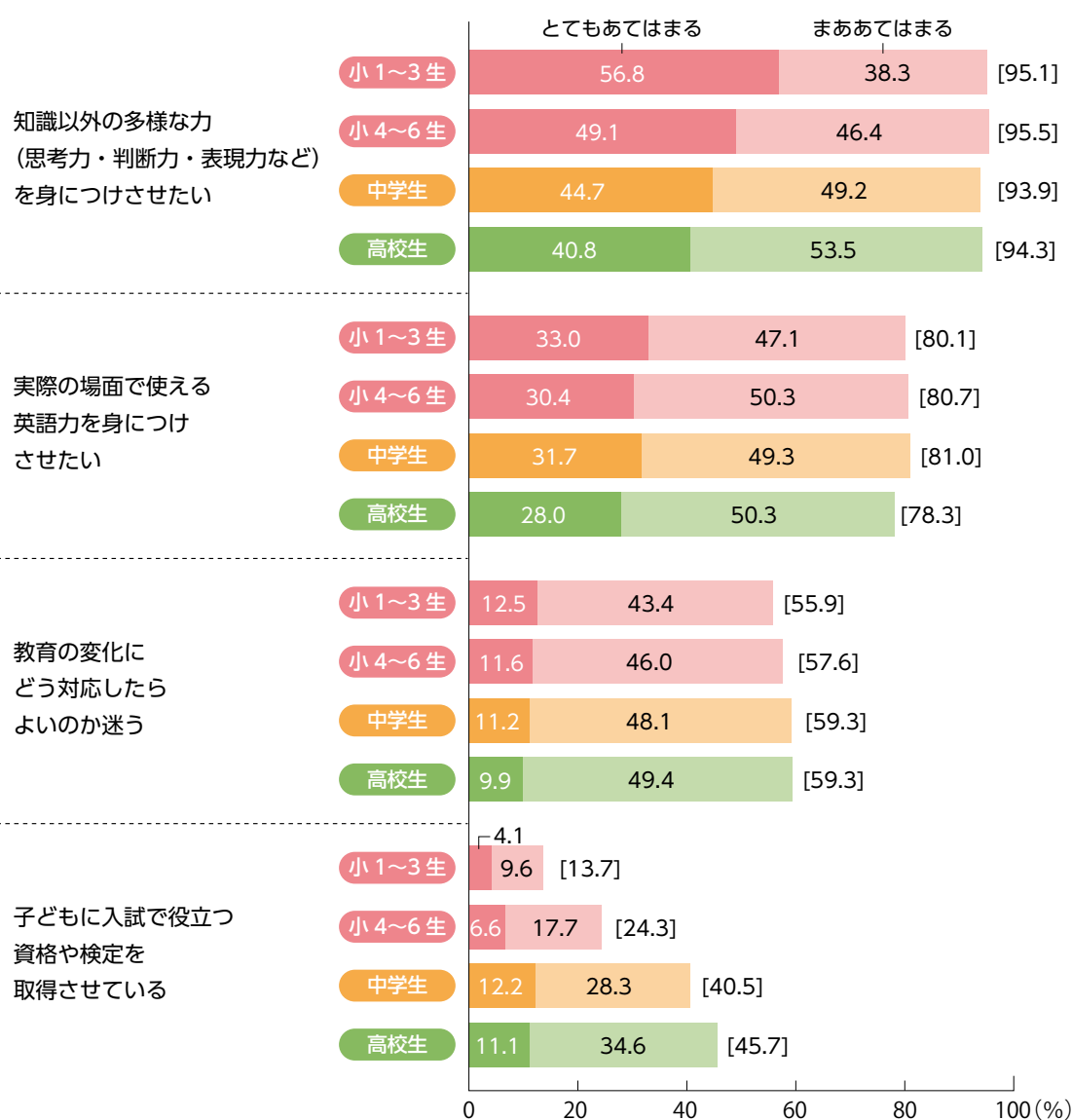
9割以上の保護者は子どもに「多様な力を身につけさせたい」と考えている

保護者に教育の新しい動きに対する意識をたずねたところ、どの学校段階も、約8～9割(「とてもあてはまる」+「まああてはまる」)の保護者は子どもに「知識以外の多様な力」や「使える英語」を身につけさせたいと回答している。一方、「入試で役立つ資格や検定を取得させている」では、学校段階が上がるにつれ、「あてはまる」の比率は上昇傾向にある。また「教育の変化にどう対応したらよいか迷う」保護者も6割弱いる。



お子様の教育について、次のことはどれくらいあてはまりますか。

保護者 2018 図4-1 教育の変化に対する保護者の意識(学校段階別)



注 []内は「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

成績下位の子どもがいる保護者ほど教育の変化への対応に迷っている

「教育の変化にどう対応したらよいのか迷う」については、各学校段階で、さらに成績別にみると、成績下位ほど、「あてはまる」の比率が高い傾向がみられた(図4-2)。また高校生のうち、成績の中・下位の高1生がいる保護者がかつとも教育の変化への対応に迷っている(表4-1)。

Q お子様の教育について、次のことはどれくらいあてはまりますか。

保護者 2018 図4-2 「教育の変化にどう対応したらよいのか迷う」(学校段階別、成績別)

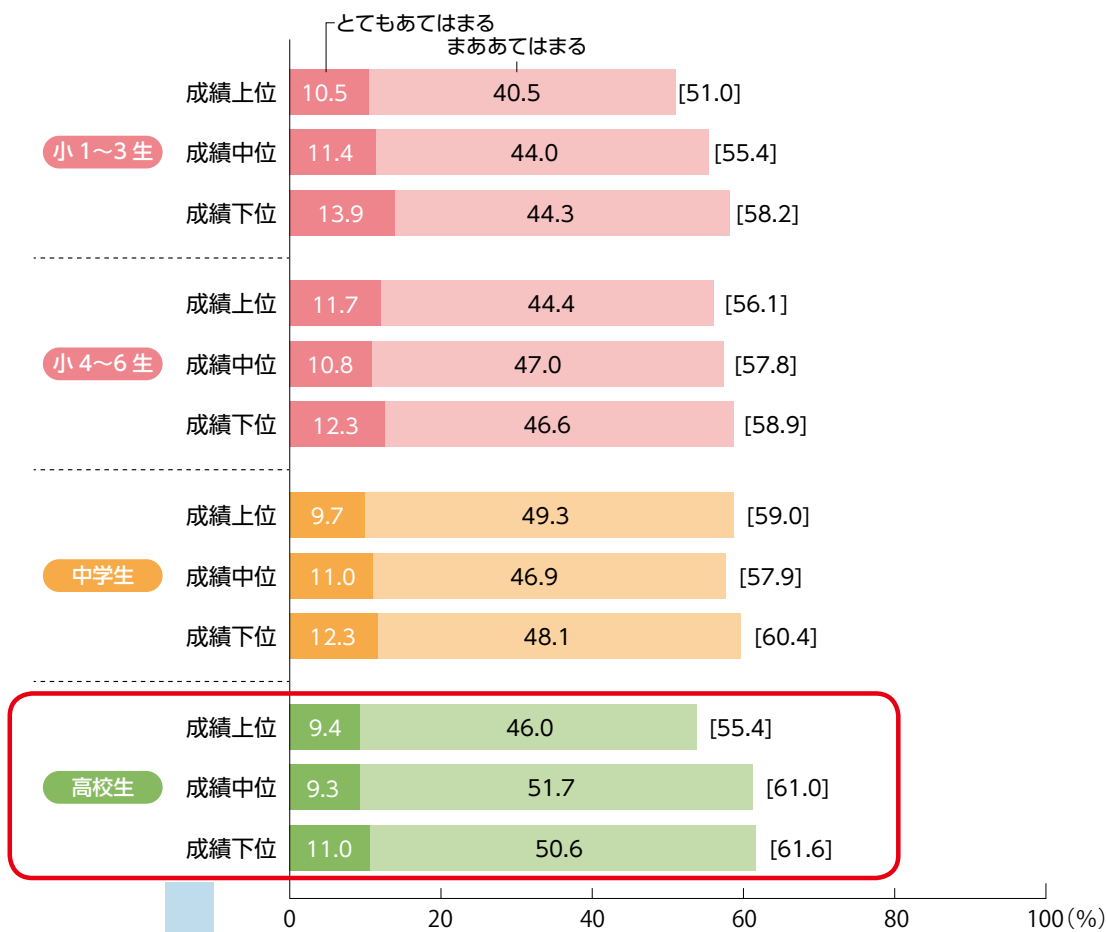


表4-1 学年別×成績別(高校生)

	全体	成績上位	成績中位	成績下位
高1生	64.6	59.5	67.5	68.4
高2生	60.0	56.3	58.5	61.4
高3生	53.2	50.0	57.0	52.9

注1 []内は「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の% (図4-2)。
 注2 「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の% (表4-1)。
 注3 成績は保護者の回答を使用。小4生~高3生については、「下のほう」~「上のほう」の5段階で回答の総合得点を算出し、学校段階ごとに人数が均等になるように、「成績上位」「成績中位」「成績下位」の3つに分類した(小1~3生については「国語」「算数」の2教科についてそれぞれ5段階での回答から算出)。

②教育改革に対する保護者の認知度

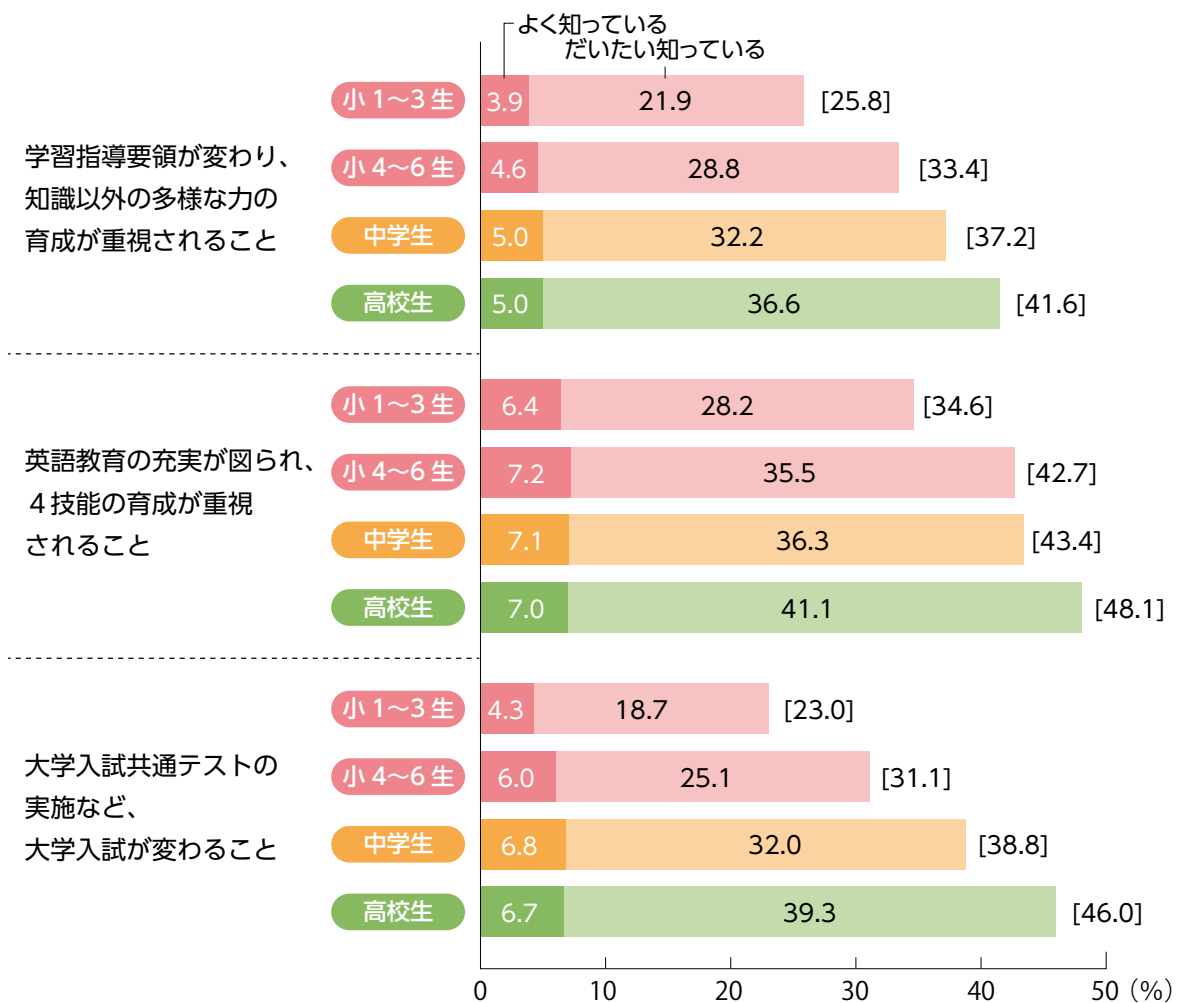
学校段階が上がるにつれ、教育改革への認知度が高まっている

教育改革への認知度に関する3つの項目のうち、「英語教育の充実、4技能育成の重視」はほかの2項目に比べ、どの学校段階も、変更内容について「知っている」（「よく知っている」＋「だいたい知っている」）と回答した比率が高い。一方、「大学入試が変わること」は3項目のうち、学校段階が上がるにつれ、認知度が高くなる傾向がもっとも顕著である。しかし、3項目ともどの学校段階も、変更内容について「よく知っている」の比率は1割未満にとどまっている。



教育改革や大学入試に関することからについて、あなたはどれくらい知っていますか。

保護者 2018 図4-3 教育改革に対する保護者の認知度(学校段階別)



注 []内は変更内容について「よく知っている」＋「だいたい知っている」の%。

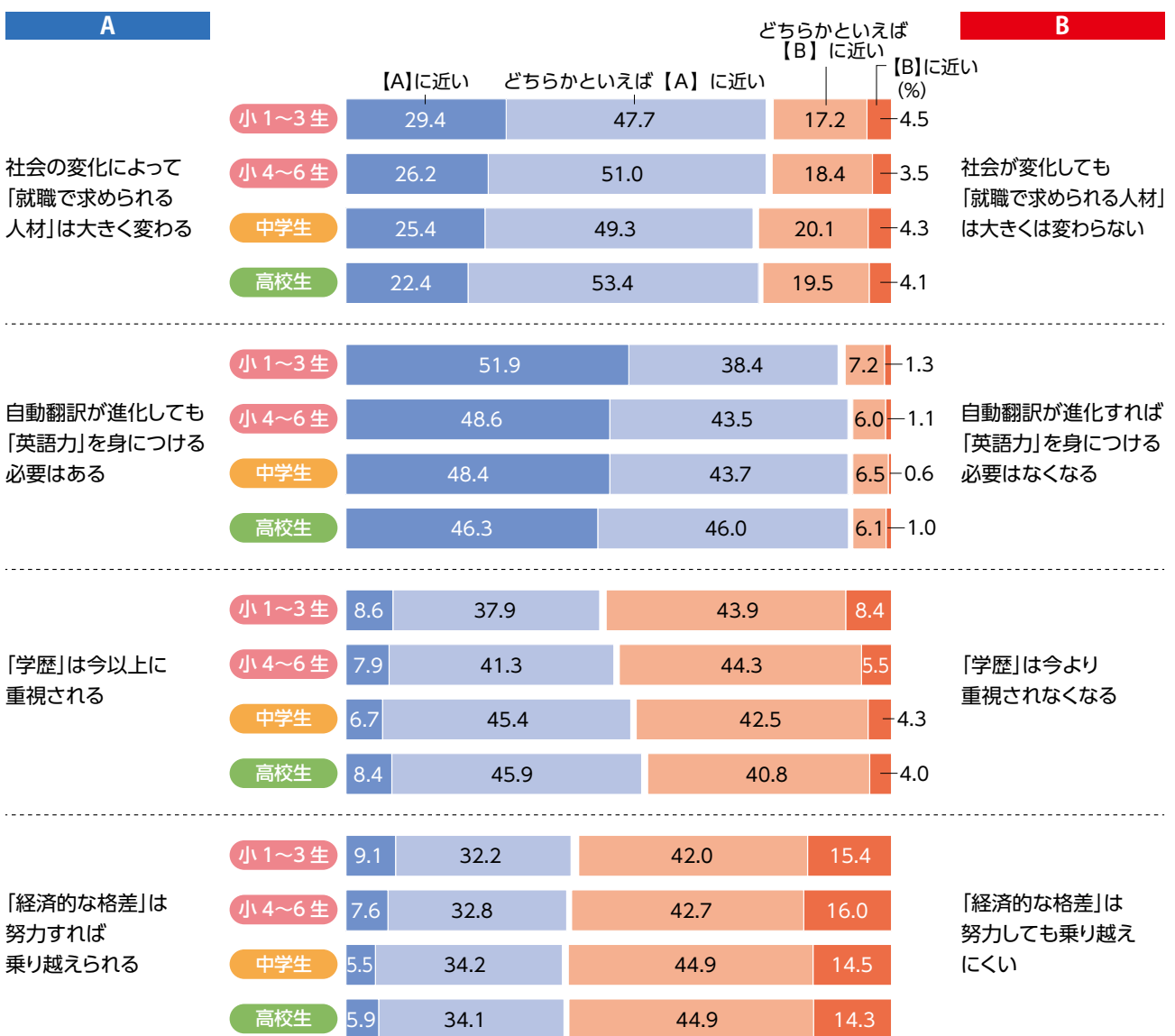
③これからの日本社会に対する考え

「自動翻訳が進化しても、英語力が必要」と考える保護者は9割を超えている

どの学校段階も、「社会の変化によって『就職で求められる人材』は大きく変わる」と考える保護者は7～8割弱となる。一方、「学歴」に対する考えをたずねると、「今以上に重視される」と「今より重視されなくなる」との2つの考え方が拮抗していることがわかる。学校段階があがるにつれ、「今以上に重視される」を選択した保護者が増加傾向にある。また、6割弱の保護者は「『経済的な格差』は努力しても乗り越えにくい」と回答した。

Q 今後の社会について、AとBの2つの意見のうち、あなたの考えに近いのはどちらですか。あてはまる番号に○をつけてください。

保護者 2018 図4-4 これからの日本社会に対する考え(学校段階別)



注 「無回答・不明」を明示していないため、数値の和が100%にならない。

「子どもの生活と学びに関する親子調査 2015-2018」

調査企画・分析メンバー

プロジェクト代表者

石田 浩 (東京大学社会科学研究所教授)

谷山 和成 (ベネッセ教育総合研究所所長)

プロジェクトメンバー

耳塚 寛明 (お茶の水女子大学教授)

小林 一木 (ベネッセ教育総合研究所 副所長)

秋田 喜代美 (東京大学教授)

邵 勤風 (ベネッセ教育総合研究所
初等中等教育研究室室長、主席研究員)

松下 佳代 (京都大学教授)

木村 治生 (ベネッセ教育総合研究所主席研究員)

佐藤 香 (東京大学教授)

橋本 尚美 (ベネッセ教育総合研究所主任研究員)

藤原 翔 (東京大学准教授)

岡部 悟志 (ベネッセ教育総合研究所主任研究員)

大崎 裕子 (東京大学特任助教)

野崎 友花 (ベネッセ教育総合研究所 研究員)

渡邊 未央 (ベネッセ教育総合研究所研究スタッフ)

※所属・肩書きは、2018年調査時のものです。

本プロジェクトのWEBサイトのご案内

本プロジェクトや本調査に関しては、以下のWEBサイトに掲載しています。

東京大学社会科学研究所：<http://web.iss.u-tokyo.ac.jp/clal/>

ベネッセ教育総合研究所：<https://berd.benesse.jp/special/childedu/>

● お問い合わせ先 ●

本速報版に関するお問い合わせは、下記までお願いいたします。

(株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所「子どもの生活と学びに関する親子調査」係
TEL：0120-105506 受付時間：10：00～17：30（12：00～13：00、土日祝日を除く）

ベネッセ教育総合研究所 初等中等教育研究室のWEB サイトのご案内
各種調査データに関しては、<https://berd.benesse.jp/shotouchutou/>

ベネッセ 初等中等

検索

で検索してください。

「子どもの生活と学びに関する親子調査 2015-2018」ダイジェスト版

発行日：2019年3月31日 発行人：谷山 和成 編集人：邵 勤風

発行所：(株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所

編集協力：(株)ジー・アンド・ピー

表紙デザイン：但馬あやの